
The Earth

ナサチル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The Earth

【Nコード】

N1260U

【作者名】

ナサチル

【あらすじ】

人間は本能のままに争った。幾度無く続く争い。もう終わりはないかと思われた。せめて人間以上の生物が現れてくれれば。人間は、その人間以上の生物を滅するために動き出すだろう。しかし、そんな生物は現れない。争い続けたどんな時代も人間が生物の頂点だった。だが、遂に争いは終わってしまった。人間同士ですら、対抗し合うことのできる勢力というものが無くなってしまった。世界は一つになったのだ。流石の人間も、争う理由が無ければ争うことは無い。争う動力源である対抗勢力がなくなってしまったのだから。そ

して本能は理解した。今は争えないのだと。だから本能は、また人間に伝達した。『待て。今は待つときだ。人間の対抗勢力が生まれるのを待つのだ。そして、そんな生物が現れたとき、待った分だけ争えばいい』人間はおとなく待ち続けた。争いへの願望は、人間よりも弱い生物で解消し、待ち続けた。そして遂に生まれたのだ。人間よりも優秀な生物。静かに、地球が世界へ生み落としたのだ。

：

1 新たな種

一つになった世界の名。『フォード大陸』
そこで全ての生物は暮らす。まあ、全ての生物が暮らすといつても、人間を中心とした暮らしには間違い無い。

しかし、そんな『フォード大陸』に、新たな種が生まれた。
額に刺青のような紋章があり、腕と脚と背中に、多少の鱗がある。その点以外は人間と同じと思ってもらえればいい。言語も『フォード大陸』の人間全てに伝わる言語だ。人間はその種をダイナ族と呼んだ。

初めは少数だったダイナ族。しかし、その人間に勝るとも劣らない知能。人間よりも発達した運動能力。それはもう、並みのダイナ族でも、オリンピック金メダル選手以上の運動能力である。素晴らしいものだ。

そんなダイナ族だからこそ、人間世界の生き方を早い段階で吸収し、溶け込んでいくことができ、数も着々と繁殖させていった。

人間もそんなダイナ族に好印象を受け、共に世界を繁栄させていくんじゃないかという勢いで打ち解けていった。

だが、しばらくしたある日。世界を揺るがす事件が起きる。

「殺したぞ！ ダイナ族の男が……人間を殺したぞ！」

人間は叫んだ。ここで人間の本能が目覚めます。

ダイナ族は人間を殺した。人間とは違う種が人間を殺した。ダイナ族……敵……

『チャンスだ。これできつかけが出来たではないか。さあ、争え。人間よ。ダイナ族と争え……』

ダイナ族が人間を殺したこの事件。当然、世界全土に広まる。広まるにつれ、本能が人間に伝わる。

そして、ダイナ族の男は殺人で捕まった。それは、警察のような生易しいものではない。

世界を牛耳るものが住む城。つまり、世界の中心部。その名は『コンセクト』

これ程の重大事件。人間全てがこの事件に注目した。『コンセクト』の判断によつてはまた争いが……長らく待ち続けた争いがまた起るのだから……

そしてダイナ族は『コンセクト』に連行され、徹底的に調べられた。そして、その結果。その『コンセクト』の中でも更に中心の間。ヒドラーの間へ連行された。これは重罪の匂いがプンプンする。

「ヒドラー様。このダイナ族について、ご報告にあがりました……」

ダイナ族の男を連行した、ヒドラーの部下が、ヒドラーにそう告げる。

しかし、その声色とソワソワした態度は、明らかに冷静ではない。

「ククク……そう焦るな。ゆっくりと報告せい。最もいけないことは焦ることにより現れる報告漏れだからのお」

ヒドラーは部下と違い、とても冷静だ。堂々とした長い白ひげを

撫でながら、シワたつぷりの笑顔でそう答える。更には常にどデカイ椅子に悠々と座っており、余裕。もう、どんな報告でもこいという心構えである。

このヒドラーの答えに、部下は少し落ち着きを取り戻した。

「はっ！ では、ご報告させていただきます。このダイナ族……いや、この男。人間でございます……」

なんと、この事件。全ては一人の人間の欲望だった。

この男はもう我慢の限界だった。争いの衝動を抑えることが出来なかった。しかし、そんなときに現れた。自分と同じような容姿。知能……力は武器で補える。男は考えたのだ。ダイナ族になりすまし、人間を殺そうじゃないかと。また、あのような争いを引き起こそうじゃないかと……

そのために、男は紋章を書き、鱗に似せたメイクを仲間に見せな……

…実行。

今に至るといわけだ。

そんな部下の報告に、ヒドラーはニヤツとした笑みを見せながら拳銃をスツと取り出す。

「ヒッ！ ヒドラー様！ 落ち着きになつて！」

部下は恐怖した。このままじゃ殺される。お願い。殺さないで。そんな気持ちでヒドラーをなだめた。

しかし、その声はヒドラーには届かない。ヒドラーは勢いよく拳銃の引き金を引いた。

部下は眼をギュツと閉じ、死を覚悟した。

「えっ……?」

しかし、部下は意識がある。体が動く。血が流れていない。不自然なこの状況に、思わず声を出した。

「ククク……勘違いはいかねえ君」

死まで覚悟した部下をあざけ笑うヒドラー。

散々あざけ笑った後、何が何だかまだ分かっていない部下に、横を見るように伝えた。

「ヒッ……ヒドラー様……いけません。まだ、彼の処罰は決まっていないというのに……」

そう。撃たれたのは部下ではなく、捕らえられた男。

ヒドラーは、初めから捕らえられた男を殺す気でいたのだ。

「わかつとらんなあ。処罰は今決まったではないか。わしは王だ。この世界を統べる王。その王がこの男を死刑だと決めたのだ。これ以上の決まりはない。そうじゃろ?」

人を殺したというのにニタニタとした笑みを浮かべながらそう言うヒドラーに、部下はまた恐怖を感じた。

「ククク……納得しとらんという顔じゃのお?」

「い……いえ! 滅相もございません!」

ここで反発すれば待つのは死のみ。精一杯声を上げ否定する。

「そう焦らずともよい。お前は、『コンセクト』の人間全てに伝えるのだ。ダイナ族の犯行だと思われた殺人は実は人間の仕業……この事実。どこにも洩らしてはならんとな……洩らせば一族全て……死じゃ。そう伝えい」

この時、ヒドラーから笑みが消えた。

笑みを浮かべるヒドラーも不気味だが、笑みの消えたヒドラーもまた不気味だ。

「ハッ！ 今すぐに！」

部下は大慌てでヒドラーの間を去った。

「ククク……これでダイナ族を滅亡させるきつかけが出来たわい。人間より優れた生物……この世には必要ないわ」

このヒドラーの言葉は本当のこととなった。

ヒドラーの命令により、人間を殺したダイナ族を敵とみなし、ダイナ族の大量虐殺が始まった。

いくら基本能力が人間より高いダイナ族といっても、武器をもたれると敵わない。それに、数にも大きな差がある。ダイナ族が逃れられる見込みなど一つも無かった。

人間が誇る軍隊に虐殺されていくダイナ族。

「さあ、てめえで最後だぜ？ 恨むなら人間を殺した同種を恨みな」

躊躇無く、泣き叫ぶダイナ族に向かって引き金を引いた。こうして、人間の手によりダイナ族は滅亡した……かに思えた……

2 怨念

もしかすると、このまま絶滅してしまった方が平和に終わったのかもしれない。知らなかった方が良かったのかもしれない。しかし、ダイナ族は知ってしまった。その高い知能から、人間の行動を計算してしまった。

『あれは我々ではない……あれは……人間の仕業……我々は死ぬことはなかった……』

ダイナ族は魂となって嘆いた。人間は故意に絶滅させた。ダイナ族は人間の身勝手な行為により絶滅させられた。

その嘆きは怨念へと変わる。そしてその怨念は共鳴し、一つの集合怨念体へと変化する。

集合怨念体は更に変化を続け、遂に……一つの生命となった。

生まれついたは、世界の片隅と呼ばれる、一人住まぬ場所『デ―ビグロー』

生まれたは、ダイナ族の集合怨念体から生まれた、事実上、ダイナ族最後の生き残り。

「私はデ―ーナ。人間に復讐する者……」

デ―ーナは自分の体をまじまじと見つめる。

鱗があり紋章がある……間違いなくダイナ族であることを理解する。

次に、人間を殺害するための道具を探す。

「これが……いいですね」

『デービグロー』に落ちていた槍を発見。これを自身の武器とすることにした。

そして、ディーナは気づく。この『デービグロー』には、数え切れない程の怨念が飛び交っていることに。

「これは全て人間への……私が、救って差し上げましょう……」

『デービグロー』に飛び交う数え切れない程の怨念を全て吸収するディーナ。

そして、怨念を吸収したディーナの頭の中に、同じ言葉が何度も木霊する。

『人間……人間。人間！！ 殺す。抹殺。人間！！』

「皆、生まれたがっている……分かりました。今、生んで差し上げます」

ディーナは、怨念一つ一つから人間への復讐心を感じ取った。

皆、私と同じ。そう感じ取ったディーナは、怨念一つ一つを生命に変えた。

怨念から生まれる生命。それはもう無数で、数え切れない。

しかし、一つ分かることがあった。

「あなた方は！」

皆、生物なのだ。犬、猫、鳥、馬…… e t c。怨念から様々な生

物が生まれる。

そう。彼等は皆、人間に不当な理由で殺された生物達。彼等は皆、人間を恨んでいる。

彼等はデイナーが生んだのではない。デイナーはただ生まれる一つのきっかけに過ぎない。

デイナーだって、人間がいなければ生まれなかった。全ては人間が生んだのだ。

人間に対する生物の怨念。そして、ダイナ族の執念が、新たな生物を生んだのだ……

そして、その生まれた無数の生命の中で、一際目を引く生物が三つ。

その三つの生命には知能があり、言葉も話せる。性別なんてものもない不思議。力も他の怨念生物と比べ強大。

デイナーは彼等に歩み寄った。

その三体は、生んでくれた恩。そして、人間抹殺を志にする同志として、デイナーを快く迎え入れ、名も名乗った。

「俺はホーク。美しい羽だろ!？」

その姿は正に大空へ羽ばたく鷺。人間の様な二足歩行の鷺だ。

「私はゲラ。よろしく頼む」

その姿は正にトカゲ戦士。トカゲだけど頭の良さそうその風貌は何か惹かれるものがある。当然、二足歩行である。

「俺はウルフ。仲良く頼むぜ」

その姿は正に獲物を狙う狼。単純そんな思考に見えて、実は切れ者の雰囲気漂う。

彼等は同盟を結んだ。

知能と力を持つディーナ。ホーク。ゲラ。ウルフを筆頭に、知能も力もそれ程無いが、無数の量を誇る怨念生物軍団。

これだけいれば人間に復讐が出来る。人間を抹殺できる。彼等は確信した。

そうと決まれば話は早い。人間抹殺のため彼等は動き出す。

3 世界全てを巻き込む戦争

怨念生物達は進軍する。

全ては人間抹殺のため。それだけで動力は十分。進んで進んで進み続ける。

まずターゲットに決めたのは、ダイナ族が絶滅するきっかけとなった忌まわしき町。

ディーナはダイナ族の怨念集合体なので、その町の場所は完璧に把握していた。これも一つの理由。そしてまずは、全力でそこを滅亡させ、知能のない怨念生物達を枝分かれさせる。これも一つの理由。

町に怨念生物が入り込んだときは、人間が地球上で最もパニックに陥ったのではないだろうか。

「ば……化け物だ!!!」「キヤー!」「なんだなんだ! どうなってるんだ!」

様々な声が飛び交った。

しかし、怨念生物の頭の中にはそんな言葉は耳に入っていない。頭の中に木霊するは『人間抹殺』この言葉のみ。

次々と人間を血祭りにあげてゆく。

あれだけ活気があった町が瞬く間に血の海となり、残るは一つの家族のみとなった。

「頼むこの子だけは助けてくれ! 俺たちはどうなってもいい!」

「お願いします……お願いします……」

ガタガタ震えながら命乞いをする夫婦。子どももガタガタ震えて夫婦の背中に隠れる。

恐ろしすぎて泣く声もでないようだ。

それを冷たい目で見下ろす。ディーナ達四体。

まず動くのはウルフ。

「俺たちはどうなってもいいってことは殺っちゃっていいってことね。ありがたやありがたや」

その鋭い爪で夫婦を一刺しにするウルフ。即死だ。

「お母さん……お父さん……！」

恐怖を噛み殺して大声で既に命のない夫婦に言葉を投げかける子ども。

これを見て、ホークが不適に笑う。

「思い出すぜ。俺も今のような経験があった。でも、人間はそれを笑いながら行っただ。そして俺も今、同じ立場にいる。殺られる側ではなく、殺る側として同じ立場にいる。これ程嬉しいことはねえよなあ」

ホークはそう言うと、羽をバサツと広げた。

「てことでこの餓鬼は俺が殺る。異論はねえな？」

そんなホークに対し、異論を投げかける三体。

「別に今、殺す必要はねえんじゃないか。勝手に死ぬだろ。俺たちが手を加えるまでもなく」

「その通りだ。我々の目的は人間の抹殺であり、無意味に殺すことではない。無意味な殺人を行うなど、人間と同じになっってしまう」

ディーナも何か言葉を発しようとした。しかし、止めた。

ホークの眼が怒り狂っているのだ。それは、人間ではなく自分達に向けられる怒りの眼。

「ここにきて奇麗事か？ 思い出せ！ 俺たちは人間に何をされてきた！？ 人間は命乞いをする生物を助けたことがあるか？ ないだろ！ 俺から見たら、今のお前等は甘い。俺たちは何のために生まれてきた！？ 人間に復讐するためじゃないのか？ 人間を抹殺するためじゃないのか！？ なのに……甘いぜ」

そして、ホークは広げた羽を一つバタつかせた。

その風圧は人一人殺すくらいいけない。子どもの体は真つ二つになつた。

「おっと。勢い余って殺つちまつたよ」

ニヤツと笑いながらそう言うホーク。明らかな確信犯である。

これにより、ダイナ族を絶滅に追いやった忌まわしき町は壊滅した。

彼等は初めて、自分たちの思うがままに人間を虐殺することに成功したのだ。

「よし！ さあ、次の町に行こうぜ！ 抹殺だ。人間抹殺だ！」

最も、その偉業に震えているのはホーク。

今、人間を殺すことにこれだけ喜びを感じている生物はいないだろう。それ程、嬉しそうに言うのだから間違いない。

しかし、それをディーナは止める。

「いえ。次からの町は彼等に任せ、私達は『デービグロー』に戻りましょう」

「なんでだよ！ 俺たちが負ける要素ないだろうが！」

当然のように反抗するホーク。しかし、それを冷静にウルフとゲラが止める。

「歯止めの効かない暴走機関銃かてめえは……なあ、ゲラ」

「うむ。考えてみよホーク。人間はなぜ我々を殺せ続けてきた？

運動能力では人間に引けをとらない。むしろ、上回る生物もいる我々がだ」

ゲラは冷静に問う。

ホークは、ゲラをギロツと睨み「知能っていいたいのかよ？」と返す。

「その通り。人間には優れた知能がある」

しかし、ホークは納得しない。

今、自分達には人間にも引けをとらない知能がある。カも人間より上。どっちにしても負ける要素がない。大丈夫だと言い張る。

しかし、ゲラが言いたいこととは返しがずれている。ゲラはそれ

を指摘した上でもう一度口を開いた。

「確かに単純な知能では今の我々は負けていない。しかし、争いの知識。これにかけては人間が上だ。人間は人間同士で争いを続けてきた。最高の知能と最高の知能同士で続けてきた争いは、もう我々が追いつけるものではない。人間は人間ですら犠牲にして、目標を殺しに来る残酷な集団だ。無闇に動くとまとめて殺られる。だから今は引くべきなのだ」

このゲラの言葉には流石のホークも黙った。

人間を抹殺するには殺られてはいけない。多少、人間を抹殺するのに時間がかかるとしても、殺られる。これだけはいけないのだ。そこに、ディーナが割って入る。

「まとまったようですね。では、私達はそろそろ引きましょ。一つ言っておきますと、この出来事は人間全てに伝わります。ホーク。どちらにしても、人間は全てをかけて私達を抹殺してくるでしょう。そうなればどちらかが絶滅しない限り争いは続きます。焦らずともどちらかが抹殺されますよ」

ゲラからのディーナ。この言葉の連携で、ホークもようやく納得の態度を示した。

「分かった。言うとおりにするよ。でも、戻った後が暇だから、面白そうなものかっばらっついでいこうぜ。それと、あんま化け物って言い方は好きじゃないから、俺たちは魔族って言い合おうぜ。そのほうがかっこいいじゃんよ？」

人間達は怨念生物達が町に入ったとき、口を揃えて化け物だと言に出した。

これをホークはあまり気に入らなかったようで、魔族にしようと言いだしたのだ。

この言葉により、怨念生物改め、名称は魔族となった。

町民皆殺し。この事件は、ディーナの言うとおり、瞬く間に人間の耳に広がった。当然、化け物が町を襲っているということもだ。この事件に怯える人もいれば、腕試しになると喜ぶ人もいる。少なからず世界全土に影響を与えた。

そして、この男もこの瞬間を喜んだ。

今まで夢見たことが叶ったのだ。人間以外との血と血の争い。大量虐殺ではなく、緊張感溢れる争い。遂にきたのだこのときが……

「ククク……神はわしに最後の快楽を与えよった。化け物。化け物か。ククク……面白い。得体の知れぬものほど面白い。得意気に町を奪うがよい。しかし、わしは黙って震えてはおらんぞ……のお、アドルフ」

恐怖に震えるなんてとんでもない。むしろ、喜びに震えているという様子。

そして、そんなヒドラーに対し、少し、いや、かなり引き気味のアドルフ。

「はい……そうでございますねヒドラー様」

「アドルフよ。今、動かせるだけのアンドロイドを『メガンナ』へ送り込め。土地開発をアンドロイドに任せ、軍隊を全て化け物退治に回す。ククク……楽しみじゃのお。楽しみじゃのお」

「はい……分かりました」

引き気味ではあるが、王であるヒドラーには決して逆らうことなどできない。おとなしくヒドラーの命令を聞くアドルフ。

これで、土地開発は心配ない。そして、軍隊を全て呼び寄せ化物退治に向かわせる。争いの始まりである。

「ククク……人間をなめるでないぞ化物ども。このわしの世界。そう簡単にとれやせんということを教えてやらねばならんな」

町民が皆殺しにされ、化物物が現れてもその不気味な笑みをやめようとはしない。

むしろ、その笑みに磨きがかかっているくらいだ。間違いなく今の状況を楽しんでいる。

「後は、あの男を動かすのみ……これで今の段階での全てが整う……」

ヒドラーの言うあの男。それは『ハーアリア』という町に住む一人の男。

彼は最強の戦闘力をもつ人間。あのヒドラーがそう称するのだから間違いなのだろう。

ヒドラーは彼を動かすために部下を一人『ハーアリア』に向かわせた。

ヒドラーには確信があったのだ。この状況をもってすれば、その男は必ず動く。

ヒドラーはニヤニヤが止まらなかった。世界が一つになって流れた年月。本当の意味での争いというのは一つもなかった。

しかし、どういう経緯かは知らないが、突如現れた化け物達。その化け物達は強い。軽々と町一つ潰すほど強い。

だからこそ面白い。人間並。いや、人間以上の生物と争える。これ程までに面白いことなどない。ヒドラーはそう考える。

そんなヒドラーが動くのは必然的なのだ。そして、人間抹殺のため生まれた魔族と争いを繰り返し続ける人間。この二つが争うのも必然的。

世界全てを巻き込む戦争。ここに開幕！

4 最強の男

ヒドラーの部下が『ハーアリア』へと辿りついた。

まだ魔族もここまででは侵略していないようで、楽に辿りつけたことにまずホッと胸を撫で下ろす。

しかし、ここからが勝負。動かさねばならないのだ。あの最強の男を……

部下は『ハーアリア』へ足を踏み入れ、最強の男を呼ぶように伝えた。

実はこの部下も、その最強の男をこの眼でみたことはない。ヒドラーから話を聞いただけである。

だからこそ、その最強の男をその眼で見たときは心底驚いた。

普通なのだ。どこからどう見ても最強には見えない、普通の好青年。

部下は本当にこの男が最強の男なのか疑った。なんせ、部下のイメージでは、とてつもないほどの大男だったからだ。

「君がフェーユ君かね……？」

「ええ。そうですよ」

なんとも普通に返答するこの男。

部下は更に怪しむ。

「それでだがねえ……フェーユ君……」

部下は、フェーユの眼をチラッと見るだけで中々内容を言い出せ

ない。まだ、百パーセント信じきれていないからだ。

「あつ、もしかして俺がフェーユだって信じてないでしょ？ まあ、無理ないよなあ」

フェーユも、部下の対応を見て、自分がフェーユだと思われてないことに気づいた。

少しへこんだ様子で髪の毛をいじくっている。

「あつ、そつだー!!」

フェーユが、手をパチンと鳴らし、新聞紙で作ったチャンバラ剣みたいなものを二つ用意した。いい方法を思いついたのだ。

「これで戦いましょうよ。これなら死ぬ心配はないですし、自分がフェーユだっていう証明にもなる。言葉よりも体で覚えるです」

部下は正直イラツときた。

部下といえども『コンセクト』で鍛えられた人間。それも、自分で自分を強いと自負している自信家でもある。大概の人間には負けつつもりはないのが本音である。

しかし、フェーユはさらつと言いのけたのだ。死ぬ心配はない。つまり、真剣なら殺してしまう。間接的になめられたのだ。正直、負かしてやろうと思った。

「いいでしょう。しかし、知りませんよ。これで負けてしまつては、あなたの心に傷がつく」

部下も、出来る範囲で精一杯反抗した。

少しは言い返してやらないと気がすまなかったのだ。

「いやあ。まあ、それはないとして、普通にやるのもつまらないですから、ちょっと条件をつけましようか。俺は一振りしかしません。それで決着をつけます。それで、これは大事なことですけど、あなたは俺の一振りを無理にかわそうと思わずに動かないで下さい。ちよつと不味いことになるかもしれない。あつ、別に八百長しようってんじゃないですよ。隙が万が一でもあれば狙ってくれて構いませんから。ただ、俺が打つ時は動かない方がいいですよという忠告です」

余裕綽々のフェーユ。これには部下も少し荒々しくなる。

「……いらないご忠告ありがとう！」

新聞紙を勢いよく手に取り、構える部下。

フェーユも部下が新聞紙を手取るのを見て、ゆっくりと手に取る。

この瞬間である。誰かが町中に知らせたのであろう。なんと、町中の人間が二人のチャンバラを見に集まってきたのだ。

「フェーユが剣を振るぜ！」「久しぶりに見れるのか！」「こんな声が轟く。」

それほどまでにフェーユの剣は凄いということなのだろうか。

「ギャラリーも集まったことだし、じゃあ、いきますか」

フェーユのこの言葉でチャンバラが始まった。

正直、手加減無しで負かしにいこうとしている部下。接待チャン

バラなどにする気はない様子。

そして、対するフェーユ。明らかにリラックスした状態である。なんせ新聞紙をくるくる回しながらジリジリと間合いを詰めてくる部下を待っているのだから。この余裕さはなんなのだろうか……

正直、部下は勝てると思った。隙だらけなのだ。どこを見ても隙だらけ。自分の間合いにさえ入れれば、どこを打っても勝てる。こいつはフェーユじゃない。少し町で実力があるだけ。口だけ、自立したいだけの素人だ。そうともでも思った。

そして、フェーユは楽々と自分の間合いまで詰めさせてくれた。勝った。部下は確信する。そして、フェーユに対し躊躇なく斬りかかるうと動こうとする。

しかし、その確信は無謀にも砕け散る。

「い……いない！」

そう。部下の瞳の先にフェーユの姿はなかった。

この一瞬が命取り。もう、部下に打ち込める範囲はない。というか、部下は見てしまったのだ。偶然にも斜め下を見ると、鬼のような瞳で斬りかかるうとしているフェーユの姿が。

「ひっ……」

あまりに恐ろしい打ち上げだったので半歩後ずさってしまっ。そして、フェーユの太刀が部下の頬をかすり、試合終了。急いでフェーユが部下の下へ駆け寄る。

「あ……危ないよアンタ！ 言ったたる動くなって。もう半歩動いたら首飛んでましたよ全くもう……太刀の軌道変えるのは難しいんですよ本当」

「えっ……こ……これは……血！」

部下が頬を撫でると、なんと血が流れているではないか。

新聞紙。たかが新聞紙で血が流れ、フェーユの技術で命まで救われたのだ。

新聞紙で命を奪う。こんなことありえない。しかも、あの斬りかかるときの鬼のような瞳。まさしく……

「これが……フェーユ……」

部下は確信した。この男がフェーユだと。最強の名……半端ではないと……

「さて、分かっていたところで本題に参りましょうか。化け物のことでしょ？ それしか考えられない」

部下は驚き、怯える心を静め、コクリと頷く。

「分かりました。やりましょう化け物退治！」

なんとという決断の早さだ。部下は驚いた。

しかし、これはこれでいいのだが、なぜ引き受けたか理由だけ聞いておきたかった。

「当たり前じゃないですか。俺は人間。人間の危機が迫っているの

に、人間がそれを助けなくてどうするって話です。でも、これにも条件を一つ。俺の一番大事な人間は、この町の人間です。この町が襲われたと知れば、どこの町よりも、中心部の『コンセクト』よりもこの町を優先して守りますよ。よろしいですか？」

「それは分かりました。伝えておきます。しかし、もう一つ聞いておきたい。フェーユ君。君は今から化け物退治をするのだよ？もしかすると……いや、もしかしなくても、常人ならば間違いなく命も落とす化け物退治だ。正直、私は怖いよ。恐ろしくて引き受けたくない。見返りもないんだ。しかし、フェーユ君。君はそれでも化け物退治をしようというのかね？ 命を……人間を守るために自分の命を捨てられるというのかね？」

部下が最も聞きかたかったことはこれだ。見返りが無い。つまり、利益がない。いや、世界中を代表するくらいの名声と富を得ることはできるであろう。普通ならばこれ以上ない見返りだ。

しかし、それに対しリスクは命。それも、困難を極めるレベルの内容。得ても知れない化け物退治だ。死ぬかも知れないではない。死ぬだろうという気持ちで挑まなければならぬ。それに対し、どれだけの名声と富を得ることが出来ようが、見返りにすらならない。こんなもの、引き受ける理由が見当たらない。

「俺は人間です。人間である以上、俺は同じ種の人間を優先して守る。自分の命一つより、多くの人間の命の繁栄。当たり前の話です」

涼しい顔で、重たい発言をさらりと言い切った。

部下はゾクツとした、なんともいえない気分となる。普通じゃない。この男は普通じゃない。

「フェーユ君。こんなこと言ったのがバレたら私は殺されてしまう。でも、言わせて貰うよ。君は馬鹿だ。不器用すぎるよ……」

「まあ、確かにそうですね。でも、いいんじゃないですか。馬鹿が人間を救う。ちょっとかっこいい」

「……失礼する……」

瞳の奥底からゾクゾクしているのが感じられるフェーユに対し、部下は今後一切、フェーユとは関わらないことに決めた。

フェーユは自分とは違う世界で生きている。ヒドラーとも違う、もっと別次元の世界……

そして、化け物退治へ出たフェーユは、数々の化け物の襲撃から人間を救った。

その救う数が増えれば増えるほど、フェーユは人間から称賛を浴びた。

そして、彼は遂に人間からこう呼ばれるようになった。『勇者』と。

5 世界の王子

魔族から人間を守り続ける勇者フェーユ。

そんなフェーユに憧れ、旅に出ようと決意する一人の人間……いや、一人の王子がいた。

世界が誇る巨大都市『レーシア』

その都市に、世界で唯一の王子。シャロンがいる。

シャロンは旅に出たい気持ちでいっぱい。

その思いは抑えられないくらいまで高まっており、思い切って大臣達に自分の思いをぶちまけた。

「いけませんシャロン王子！　いくら王が許しても、わしら大臣が許しはしませんぞ！」

「そうです。王子の武術の鍛錬の努力は私も感心いたします。しかし、王子はまだお若い。まだまだ未熟です。一步外に出れば、すぐに化け物どもに殺されてしまいますぞ」

大臣たちは、王子の決意に猛烈に反対の意を示した。

しかし、そんな大臣たちの言葉にも納得がいかないシャロン。ムスツとした顔で一言反論する。

「僕はこの世界の王子だぞ！　僕に反抗することは許されないんだ」

この一言には、流石の大臣たちも言葉が止まる。

下手なことを言いすぎて王子に処罰を下されてしまうと、今までの安定した自分達の生活が一瞬にして碎けてしまう。それはいけな

い。大臣たちは、シャロンの身の安否よりも、自己防衛を選んだのである。

しかし、このまま旅に行かせて、シャロンが死んでしまったとなると、それはもつと危ない。生活以前に命が碎けてしまうかもしれない。それはどうしても避けたい。

となると、導かれる答えは一つ。王子を旅に行かせ、なおかつ生かす。しかし、そんな都合のいい方法が……

「そうだ！」

あった。大臣の一人が思いついたのだ。あの女を使えば……

この巨大都市『レーシア』には、世界に誇る格闘家が住む。

その格闘家の女性は、はつきりとは分らないが、あの勇者フェーユに継ぐ実力者じゃないのかと言われている人間であり、シャロンの護衛を任せるにはもってこいなのだ。

大臣たちは皆合意。

シャロンに案を持ちかける。

「ということは、僕の旅を許してくれるんだね！ それに僕の身を安じて護衛まで……ありがとう。本当にありがとう……」

「お……王子……」

大臣たちはシャロンの予想外の行動に焦った。

なんと、シャロンがぼろぼろと涙をこぼしだしたではないか。

それほどまでにフェーユに憧れ旅に出たいのか……大臣たちは不思議に思いながらもシャロンをなだめる。

そして、次は格闘家の下へ向かい、了承を得なくてはならない。

ある意味これが一番大変だ。王子のためとはいえ、命を剥きだしにして守ってくれなんていう要求に応える人間などほとんどいないだろう。

大臣たちは心臓をバクバクさせながら格闘家の下へ向かう。今さら王子に旅へ出るのをお止め下さいと言う訳にもいかない。今考えると、大臣たちの提案はかなりギリギリのラインである。

そんな思いで押しつぶされそうになりながらも、大臣たちは格闘家が住むと呼ばれる洞窟の前まで辿り着く。

そして大臣たちは、自分達の要求を呑んでくれと心から願いながら格闘家を呼ぶ。しばらくして、泥だらけの体。そして、まさに格闘家として似合う、真っ赤に染められた髪の毛の女性が洞窟の中から現れた。

「客人とは珍しいな。もしか果たし合いか？」

出てきて言葉を発するや否や、鋭い目つきでファイティングポーズをとる格闘家。

これには大臣たちも驚く。

「めっ……滅相もない！ こんな老体に何が出来るというのです！ わし達はこの世界の大臣達ですじゃ！」

驚きながらも、黙っていても殴られるかもしれない。慌てふためきながら弁解する。

まあ、敵意がないと分かれば戦意をむき出しにする意味はない。格闘家は静かに拳を下ろし、柔らかな目つきに変わった。

「これはとんだ無礼を。だが、世界の大臣が揃いも揃って私のよう

なただの格闘家に何の様だ？」

「実は……」

まず、格闘家が話し合いに応じたことにホツとすると、大臣たちは包み隠さず正直に、シャロンのことを話した。

勝負は短期決戦。これで領いてくれなければ自分達は終わり。大臣たちはゴクツと息を呑み、格闘家の返事を待つ。

「それでわざわざこんな山奥まで……それで、その王子はどこに？」

そう。ここは『レーシア』ではなく、『レーシア』近隣にある山の奥。

確かに、この格闘家の住む場所は『レーシア』だが、どうにも都市の空気は合わないらしく、山籠りして自分自身を鍛えているのだ。格闘家らしいとしてはらしい住処である。

そして、そこまで重い体に鞭を打って、大臣たちは山奥までやってきた。それに敬意を称し、格闘家は大臣の話の間ごとと思っただ。ラッキーといえばラッキーな話である。

「王子は『レーシア』で待っております。ついてきて貰えますかな！？」

期待を込めた声色でそう言う大臣たち。

そして、期待に答えるように頷く格闘家。

「ああ。一言言ってやりたいからな。自ら出向かぬような王子に」

大臣たちは格闘家のその言葉に、機嫌を損ねない程度の苦笑いを

しながら頷き、山を降りた。

「山を降りたのは久しぶりだな。しかし、全く変わっていないじゃないかこの都市も。化け物が出たと言うから慌てふためいているのかと思えばそうでもない……平和だな……」

「殺伐とした世界を望んでいるのですか？」

「いや、そうではない。危機感が足りないと思ってな。化け物が現れたから拳を握り銃を取る。これくらいの状況になっているのかと予想していたものでな。あまりの違いに、つい言葉に出してしまった。すまない」

格闘家の言うとおり、確かに都市の人間達は魔族が現れたので怯えたり闘争心を剥きだしているのかと思えばそうではない。道の途中途中で笑顔で話しながら歩く人間達。皆、笑顔に満ちている。魔族が現れたというのに皆……自分達は安全とも思っているのだろうか。

「……王子はこちらです。どうぞ」

もう、格闘家の言うことが理解できない大臣たち。

適当に流し、王子と会わせることにする。

ドアを開けると、そこはまさに王室。

王子を守る兵士がズラズラ並び、その奥には立派な椅子に座るシヤロンの姿。

格闘家は、その中を堂々と歩く。そして、シヤロンの目の前でピタッと止まる。

「この方が王子の護衛をしてくださる格闘家でございます。どうぞ
ごぞいませう?。」

ニコニコとシャロンに格闘家を紹介する大臣たち。

「どうもこうも、僕の護衛を引き受けてくれるなんて大歓迎だよ。
僕はシャロン! よろしく!。」

シャロンも、護衛を引き受けてくれたことが嬉しいらしく、笑顔
で格闘家に挨拶する。

「というか、まだ格闘家は引き受けてはいない気がするのだが……
まあ、そこは置いておこう。」

「王子……。」

格闘家は、そう呟くと、眼をカツと見開いてシャロンを見た。

その瞬間。この場にいる半数ほどの兵士が手に持つ武器を格闘家
に対して構えた。

「えっ! 何してるのさ皆! なんで武器を構えるの!。」

いきなりの兵士達の行動に、慌てるシャロン。

そんなシャロンの反応に、格闘家はフツとあざ笑う。

「半数か……やはり危機感が足りない。王子。あなたが旅に出るの
は正解です。この場にいるよりも私という方が、死亡確率は少ない
でしょう。」

「な……何!?。」

怒りを露にする兵士達。

しかし、それも格闘家はあざ笑う。

「本当のことを言ったまでだ。あんな殺気に気づけないお前達が王子を守るはずは無い。というか、王子を守るといった姿勢が気に食わない」

格闘家の言葉に兵士はまた怒りの声を上げるが、まだ我慢する。
ここで挑発に乗るほど兵士達も馬鹿ではない。しかし……

「お前達が王子を甘やかしたお陰で、王子はあんな頼りなく育っている。あれで旅に出ようというのが馬鹿げた話だ」

この一言で兵士達の中で何かが切れる。
そして、一斉に格闘家を襲う。

「やれやれ……こつも思い通りにいくとは……」

格闘家が兵士達を迎え撃とつと拳を握ったその時……

「止めて！ 駄目だよ！ 僕達が争っちゃ駄目！」

王子の言葉に、兵士達も動きを止める。

歯を食いしばりながら、眼では格闘家を睨みつけながら動きを止める。

「なぜそう思う？ 王子。なぜそう思う！？」

「僕は血を見るのが嫌い。特に、人間同士で争う血が。だって可笑しいもん。どうして、同じ人間同士で争わなくちゃならないんだ……」

…だから僕は思う。この化け物は神からの試練なんだって。神は、僕達に協力の意味を教えようとしてるんだって……だから、今こそ僕達人間は力をあわせて化け物をやっつけなきゃならない時なんだ。なのに駄目だよ……」

「王子……」

兵士達が皆、武器を下ろす。シャロンの心が伝わったのだ。しかし……

「だが、残念ながら王子の意向は人間には伝わっていないようだ。まだまだ危機感のない人間だらけだぞ」

格闘家は反論する。

必死な眼をしたシャロンを見つめる冷静な眼。何かを狙っているようにも見える。

「それは僕が弱いからなんだと思う。僕が弱いから僕を守ろうとする。僕が弱いから皆に現状が伝わらない……僕はこの世界の王子で、僕に反抗することは許されない。僕は皆に、協力して戦おう。人間の世界は人間が守るしかないんだ。そう言いたい。でも、僕が弱いから伝わらないんだ……だから僕は旅に出て強くなりたい。僕が強くなればきつと伝わる。僕……王子だから……皆に引っ張ってもらうんじゃないくて、引っ張らなくちゃいけない。このことに気づくの……遅かったかな……」

また、あのとさのように涙をぼろぼろと流すシャロン。

シャロンは魔族と勇敢に戦うフェーユを見て気づいたのだ。

このままじゃいけない。僕達人間も戦わなければ……フェーユや軍隊に任せっぱなしじゃいけない。伝えなければ。王子として、人

間に伝えなければ。協力して戦おう。人間の世界は人間が守るしかない。そのためには旅に出て強くないと。自分自身が……

シャロンはそういう気持ちから旅に出ようと決意したのだ。
紛れも無い本音である。

このシャロンの決意に対し、初めて格闘家がニコツと笑う。

「聞いたぞ。王子の本音。確かに聞いた。任せろ。私……格闘家フアイが、王子の右腕となり、強くしてみせる。間違えるほどにな。それに、王子が気づいた気持ち。決して遅くなんてない。気づくことが大事なんだ。そこに早い遅いはない。そして、そこに気づいた王子は、やはり王子です」

そう言うと、ファイがシャロンの下へ近づき、ゆっくりとシャロンの手を引いた。

「泣いてはなりません。強くなるうという者が、引つ張ろうという人間が……さあ、行きましょう。涙を拭いて、拳を握り、剣を抜き……強くなりましょう」

シャロンが静かに頷き、流れる涙を必死に止めようと頑張る。

そして、必死に流れる涙を止めたシャロン。旅立とうと歩き出すと、二人を送り出す大臣や兵士達が叫ぶ。

『いつまでも待ってます王子。我々も強くなって……待ってます王子！』

この激励の言葉に、シャロンはまた涙腺が緩む。

「そういつこと言わないでよう……また……泣いちゃうじゃないか
あ！」

そんなこんなでまだまだ未熟な王子。そして、それを支える格闘
家ファイ。

この二人もまた魔族の脅威となる存在となるのか……それはまた
後の話である。

6 行動開始

魔族としては最大の敵であるフェーユ。

そんなフェーユの活躍は、瞬く間に魔族の下に轟いた。

「おいおい。このままでいいのか？ 人間どもも本格的に動き出したようだぜ」

そう言つても、トランプをシャッフルしながらのん気になっているホーク。

「どうやら、忌まわしき町でかっぱらってきたトランプがお気に入らしい。」

「いいわけねえわな。多勢に無勢で交戦してる人間どもはまあいいとして、人間なのになった一人で交戦してるフェーユってのが気に食わねえ」

ウルフは、フェーユをかなり敵視しているようだ。

その鋭い牙で噛み付いてやろうという勢いで言葉を発している。

「そんじゃ、そのフェーユってのを早く抹殺しねえとな。脅威の種は早く摘まねえと化けるかもしれねえ。弱い『3』だって革命が起これば、強い『2』にも勝てる。それも圧倒的にな」

トランプを使いながら説明するホーク。

「一見ふざけているようにも見えるが、話の内容としてはその通りで、早めに殺しておかないといけないことは確かだ。」

そこで、言葉を発したのはゲラ。

「私がフェーユ討伐に行こう」

しかし、他の二人は納得できない。行くなら皆で行く方が確実にいい。

もし、一人一人がフェーユの実力に及ばないとしても、三人一緒なら勝てる。間違いなくリスクは少ないのだ。

しかし、ゲラは反論する。このメンバーの中で、最も慎重なゲラ。三人全員で出向くのは得策ではないと考えているのだ。

「いや、私一人で行こう。今回のケースは、力も知恵もある人間。

何らかの形で敗北する可能性があるのなら、犠牲は少ない方がいい」

「でもよお……それでフェーユを討伐できなかつたらどうすんだよ？ ゲラが死んじまうなんてやだよ俺？」

真剣な顔でゲラを心配するホーク。

怒るときは怒り、心配し悲しむときは悲しむ。典型的な感情タイプである。

「そこは心配ない。引き際くらい知っているつもりだ。そうだな。言い方を変えよう。討伐というよりも調査くらいに思ってもらえればいい。脅威にならぬレベルなら殺すし、脅威のレベルなら報告に戻る」

それでも、心配の声を上げるホーク。

しかし、それをウルフが止める。

「ああ。任せたぜゲラ。お前の報告を待つ間、俺も色んなケースを想像して作戦を考えておく」

これにはホークも二人の意を汲み取ったのか、何も言わずゲラを送り出した。

「なあホーク。確かにファミリーを心配するのも大事だが、ファミリーを信じるのも大事なんだぜ？」

ゲラがフェーユ討伐に向かった後、まだ、百分納得していないとみえるホークに対し、ウルフは優しい言葉、しかし、キツイ口調で話しかけた。

「分かってるよ。でも、仕方ねえじゃん。俺の心はファミリーを心配してるんだ。そりゃファミリーを信じたい。というか信じてる。でも、俺の心は滅茶苦茶心配してるんだよ。その気持ちを押し切つてまで……何も言わねえで見送るなんて俺には出来ねえよ」

「ハハハ！ 確かにそりゃそうだ。お前にしちや上出来な台詞だなあ」

真剣に発したホークの言葉に、大声で笑いながら転げまわるウルフ。

「どうやら、真剣なホークはウルフにとってツボらしい。」

「笑ったなあ……笑いやがったなあ！ マジだった俺を笑いやがったなあ！」

笑い転げまわるウルフに飛び掛るホーク。

「おいおい。痛いじゃねえかホークさんよお？ フェーユの前にまずはお前を食いちぎってやるつかあ！？」

二人の幹部のどんちゃん騒ぎの大乱闘。端から見れば完全に喧嘩である。

当然、二人はこの後、騒ぎを聞きつけたディーナに止められ、ひどく怒られたのは言うまでもない。

とにかく、魔族も本格的に動き出した。

狙うは勇者フェーユ。彼の力を見極めることが、魔族の今後に大きく影響してくるのも言うまでもない話である。

7 人間の強さ

フェーユ討伐のため、進み続けるゲラ。
しばらく進み続けていると、人間と魔族が争いを繰り返している争いの場へ辿りついた。

銃器で魔族を確実に撃ち殺す人間。撃ち殺されながらも、その無
限に近い数でノロノロと進み続け、人間を食う魔族。この地獄のよ
うな光景に、ゲラは思わず眼を伏せてしまった。

「ここを抜けねばならんのだな……」

眼を伏せている場合ではない。

ゲラは、この争いの隙を狙って先へ進まねばならない。注意深く
争いを見つめる。

「なんだ。楽に行けそうだ」

そう。人間は魔族を撃ち殺すのに精一杯。というよりも夢中。完
璧に気を取られているのだ。その中を、魔族の中でも誰もが認める
実力者のゲラの手にかかれば抜けることなど造作も無いこと。楽々
とクリアである。

ゲラが進む途中。このような争いが無数にあった。

何日も……どれくらい進んだか覚えがないくらい何日もかけてこ
まできたというのに、争いが途切れることはなかったのだ。

そして、その争い全て。眼を伏せるような地獄のような争いであ
ったが、ゲラが確認できたことがある。

「皆、楽しそうであった……憑かれておった……やはり人間……争いに生きる生物よ……」

ゲラがそう言い、ため息をついていると、体中の神経がビクツとなり、ゲラを刺激した。

「近い。ほう。人間とはいえ、中々の闘気をもっておる。油断できんな……」

ゲラは、『デービグロー』で拾った剣を抜き、構える。

自分の体の特性を武器とする魔族と違い、ゲラは世界の産物を武器とする変わった魔族なのである。

闘気の流れを感じる方向にジリジリと距離を詰めてゆくゲラ。

この闘気だけでも、フェーユがどれ程の人物なのか分かる。流れ出る汗が止まらぬのがいい証拠。

「見えてきたぞ……しかし、二人？ フェーユは単独行動ではないのか！」

魔族の中でも眼が格別にいいゲラ。

遠くから歩く二つの人影を察知する。しかし、闘気が溢れ出ているのは一人。ゲラはその一人を標的に定め、一気に進む。

それは相手も同じだったようで、物凄い勢いで間合いを詰める両者。そして、そのままの勢いで合い向かいあう。

「さつきからピリピリと感じていた闘気……貴様のものか？」

「それはこちらの台詞だぞフェーユ。手合わせ願おう」

口を開く両者。しかし、ゲラは一つ間違いをしている。

「フェーユ……？ 私達はフェーユではない。標的が違ったか？
残念だったな化け物。しかし、逃がさんぞ」

「フェーユ……ではない？」

そう。ゲラが出会ったのはフェーユではない。シャロンとファイ。
ゲラはファイの闘気をフェーユの闘気だと勘違いしたのだ。まさか、これほどまでの闘気をフェーユ以外の人間が放つことが出来る
とは思わなかったから……これによりゲラは、人間の恐ろしさを再
認識する。

しかし、今この時、そんなことは関係ない話。
出会ったからには殺るしかない。

「それは残念な知らせだ……しかし、そなたのもつ闘気。只者では
ないとみた。だからこそ隣の少年が気になるものだな。まあ、人間
としてはレベルの違いに気づくのは大したものだが」

そう。シャロンは怯えていた。

シャロンとファイの旅の中、数々の魔族と出会い、そして倒して
きた。

着々とシャロンも実力をつけているのである。だからこそ分かる
……恐怖。

「そうだろう。王子は成長している。といつても、まだ貴様と戦え
るレベルではないがな……というわけで、私はフェーユでもないし、
王子は見ているだけだ。しかしまあ、落ち込むことはない。私が思

う存分楽しませてやる。礼に命を貰うがな」

そう言うのと一つ深呼吸をし、拳をギュッと握り、構えるファイ。戦闘態勢ばっちりである。

「私の名はゲラ。そなた……名はなんという？」

「そんなことはどうでもいい話だ。早く構えろ」

「名はなんという!？」

ゲラの眼がカツと見開く。

「ファイ……格闘家ファイだ!」

思わず名を名乗ってしまうファイ。

これはもう言わざるを得なかった。いきなりの思いがけぬ闘気。ファイの神経にピリピリと緊張が走ったのだ。デカイ。これ程までの闘気。ファイの人生の中、最も大きな闘気。そう断言できるほどデカイ。

しかし、ファイは臆したから名を名乗ったのではない。

反射的に名乗ったのだ。

格闘家は、どんな者であろうと強き者には名を名乗る。その習性が働いたのだ。

つまり、ファイはゲラを強き者として認めた。そして、ゲラもファイを強き者として認めた。

そして、強き者は強き者と戦うことに快感を感じる。

証拠に、ゲラの眼は血走っており、とてもいつもの冷静なゲラと

は思えぬ姿。ウズウズが止まらないのだ。

ファイだって、さつきから体の動きをとめることが出来ない。勝手に体が動いてしまう。ワクワクが止まらないのだ。

「ファイ。良い名だ。覚えておこうぞ」

「王子。出来るだけ離れて……この戦いを見て学んでください。そして、私に何があっても近づいてきてはなりません。ここは不幸にも障害物のない広い草原。追いつかれるのは目に見えています。早い段階で見限るよう頼みます」

「その通りだ少年。もし、邪魔などするものなら……許さんぞ？」

優しく……いや、厳しい言葉を投げかけるファイ。

シャロンを鋭い眼光で睨みつけながら脅しのように言葉をぶつけるゲラ。

そんな両者からの精神圧迫攻撃に耐えられるはずもないシャロンは、ガタガタ震えながら頷くと、ヨロヨロと離れていった。

シャロンが離れたその瞬間。二つの闘気は、直線に相手の方を向く。

拳を構える時も、剣を構える時も、相手から眼をはなさない。

そして……動く瞬間はほぼ同時。拳と剣がぶつかる。

ぶつかり合う拳と剣。

だが、遠くで見ていたシャロンにも分かることがある。

「ファイが……少しずつだけど……ファイが押されてる……」

シャロンの言うとおり、多少ファイが押されている。

微量とはいえ、戦力差があるのだ。

この戦力差。大人数だとそれ程気にならない。その程度の戦力差だが、一対一の場合。その程度の戦力差がものをいう。相手が何らかのミスをしないう限り……隙をつけない限り勝てない。

しかし、ゲラは鬨気通りの強者。隙を見せる様子などない。

ならばどうする。自分に何が出来る。シャロンは考えた。そして、結論にたどり着いたのだ。

「このまま……黙ってみているなんてできない……大丈夫。僕だって少しは強くなったんだ。ファイのお陰で……何回も助けてもらった。戦い方を教えてもらった。今度は……僕が助ける番だ！」

シャロンは恐怖を押さえ込み、戦いの場へ走る。

走りながら不恰好に剣を構え、大声を上げながら突撃する。

もう、シャロンの心はファイを助けることではいい。前など見えていない。

この事態にいち早く気づくゲラ。複数戦の態勢をとるため、ファイから一度離れる。

「王子！」

ゲラが離れたことにより自由になったファイは、ゲラとの戦いを中断し、シャロンの下へ走る。

「……」

この状況を予想していたかのように、ゲラは何も言わず一定の距離を保ちながらファイに続く。

そして、ファイがシャロンの下へ辿り着く。

「王子！ 危険と言ったでしょう！ どうして……王子？」

ファイが言葉をかけたその先に、シャロンは既にいなかった。

そう。シャロンにはファイが見えていなかった。ファイを救おうとする一心で動くシャロンは、当事者のファイすら見えていなかったのだ。シャロンが見えているヴィジョンは、ゲラにいずれ倒されるであろうファイの姿のみ。シャロンはそこへ向かって突き進むのみ。

そして、真つ直ぐ進んでくるシャロンに対し直線に位置する様に立ち、怒り心頭である顔つきで剣を構えるゲラ。

「うわああああ……！」

シャロンのヴィジョンとゲラの位置が一致したのである。大きな叫び声を上げながら剣を振りおろすシャロン。しかし、その振りおろしを冷静に対処するゲラ。大きく隙の出来たシャロンに対し、一撃を加えようと剣を構える。

「少年！ 邪魔をするなどといったであろう……！」

確実に殺してやろうと、シャロンに向かって鋭い斬撃を繰り出そうとするゲラ。

これは本気で殺す気である。

「なっ……！！！」

ゲラの剣は当たった。確実に当たった。
しかし、それはシャロンではなく、ファイに……

「そこで守るか……どこまでも本物。少年。ファイに感謝だぞ」

ファイがシャロンを突き飛ばし、自分を犠牲にしてシャロンを守った。

ゲラの斬撃がファイの身体を真っ赤に染め、大ダメージは避けられない。もう、戦える状態ではない。

「王子……大丈夫ですか……？」

シャロンの勝手な行動によりこうなったこの事態。

しかし、それでもファイはシャロンを心配する。その心が、シャロンをまた動かす。

「ごめん。大丈夫。僕は大丈夫……だから！」

落とした剣を拾うシャロン。そして、まだ不恰好な構えながら、ゲラに向かい構える。

「来い化け物！絶対にファイを殺させないぞ！僕が首だけになっても噛み付いてやる……絶対にファイを殺させない！」

どれだけ凄んでも闘気を感じないその姿には説得力の欠片もない。しかし、ゲラは剣をおさめる。

「少年。心意気は認めよう。だが、それは無理というものだ」

そう言うと、ゲラは元来た道に向かって歩き出す。

「少年。ファイ。そなた達が二人揃って実ったとき……その時は容赦なくこの剣をそなた達の血で赤く染めよう」

そう言つてゲラは去つた。

結果的に二人は助かった。しかし、生かされたのだ。

この結果に、格闘家のファイは納得できるわけがない。しかし、ここは自分を突き通す場所じゃない。それも理解している。ファイは、言葉を発したい口をギュツと噛み締めて塞いでいたのだ。

「ファイ！ ファイ！！」

何度呼びかけても返事のないファイに、焦るシャロン。

だが、大丈夫。この呼びかけにようやくファイが口を開く。

「王子……どうして見限らなかつたのですか……私に勝機が見えなから駆けつけたのでしょうか？」

「見限れる……見限れるわけじゃないか……ファイを置いてなんていけないよ」

泣き崩れるシャロン。

ファイの頬に、シャロンの涙がこぼれる。

「王子。強くなろうというものが泣いちゃ駄目だと言つたでしょう？ さあ、涙を拭いて行きましょう」

泣き崩れるシャロンに、精一杯の微笑みでそう言つファイ。

微笑むファイを見れるなんてレアな話である。

「うん……でも、ファイは傷だらけで歩けないよね。僕がおぶつてあげるよ。そして、近くの町で傷の手当てしよう？ うん。それがいいよ」

そういつて、おぶさるポーズをとるシャロン。

しかし、ファイは顔を赤らめ、それを否定する。

「恥ずかしがらなくても大丈夫。僕が守るから。僕……強くなりたいと。僕がファイを守るくらいにならないと……だから、町に行くまでに現れる化け物は全部僕が倒すよ。僕が守る」

ニコツと微笑み、覚悟を決め、そう言うシャロンに否定できないファイ。

静かにコクツと頷き、顔を赤らめながらおぶってもらいながら町へと向かった。

ゲラが出会ったのはフェーユではなかった。

しかし、新たな強者を見つけたことは決して無駄ではない。

シャロンとファイもゲラと出会ったことで、ファイは自分の無力さを知り、シャロンも無力さを知った上でファイを守るという目標が出来た。これも無駄ではない。

これだけだといいい出会いで終わるのだが、一つ予想外の出来事が起こった。

「なんと、言葉を話す化け物がいるとは……そして、まさかあのシヤロン王子が旅に出ているとは……ヒドラー様に報告だ！」

全て見られていたのである。遠くで一人の軍兵が全て見ていたのだ。

「これはまじっ、プロテラーに伝わるのは間違いない事実である。」

8 アンドロイド

世界の中心部『コンセクト』に住む、世界を統べる者ヒドラー。彼の下には、毎日毎時間様々な報告がはいつてくる。

魔族の討伐状況。軍の死亡数。民間の死亡数…… e t c。

そして、当然ながら勇者フェーユの活躍。最近では、シャロン王子がお供を連れて旅に出たことや、魔族のくせに言葉を話す謎の化物トカゲの報告もはいつてきた。

当然、シャロン王子とは、シャロン。お供とはファイ。謎の化物トカゲとはゲラである。

これだけ色々な予想外な情報が入ってくることにヒドラーが焦っていると思いきや、それでもならないらしく、いつものように不気味なニヤニヤした表情を浮かべながら報告を聞く。

どうやら、今のこの状況が嬉しいといった様子だ。

しかしヒドラーには、シャロンやゲラよりも気になることがあった。

「アドルフよ。お前の最高傑作はまだ完成せんのか？ 少々時間がかかりすぎではないか？」

さっきまでとは打って変わり、神妙な顔つきでアドルフに語りかけるヒドラー。

「申し訳ございません。もう少々時間をくださいませ。しかし、大丈夫です。他のアンドロイド達は立派に働いております。ご覧くださいませ。アンドロイド達が町を作る風景でございます」

ヒドラーは完成を待ち望んでいた。世界を震撼させるほどの高性能アンドロイドを。

だが、バツサリとまだだと言われ不機嫌になるも、他のアンドロイド達の状況を見るのも大事なこと。素直に頷き、町を作る風景ビデオを見ることがした。

風景ビデオを見るヒドラー。その横では、アドルフが眼を輝かせながら状況を語る。

「ここです！ この機転は人間には難しい、アンドロイドだからこそできた場面でしょう！」

他にも色々なことを活き活きと語る。

いつもはヒドラーの言葉に対し、犬のように従っているアドルフが、ヒドラーの言葉にも反発の姿勢を見せる。つまり、自分を見せられる唯一。それが、アンドロイドなのである。

「どうでしたでしょうヒドラー様!？」

風景ビデオが終わる。

まあ、率直な話。どこからどうみても普通のビデオである。特に言うべき点もない。しかし、確かに疲れ知らずのアンドロイドなので、人間よりも効率的に動いているのは分かる。

「もう一度。もう一度見せてくれんか？」

ヒドラーのニヤニヤが止まった。

そして、真剣な顔でそう言ったのだ。これにはアドルフの眼の輝きが消える。

ゾクツとした感覚に襲われたのだ。こういう時のヒドラーは何よりも不気味なのである。アドルフは静かに「はい……」と言うと、またビデオを再生した。

ビデオを見ながら、ヒドラーは足をカクカクと揺らし、爪を噛み、首を傾げる。

確かに風景そのものはアンドロイドは町を作る。それだけの風景。しかし、何か違和感がある。ヒドラーにはその違和感が伝わる。

そして、何回も繰り返し見るうちに、その違和感が鮮明に浮かび上がってくる。

おかしいのだ。アンドロイドは所詮人間に作られたもの。アンドロイドがとる行動など、所詮プログラムにすぎない。それは感情だつて同じ。感情もプログラムによるものだ。しかし、なぜかプログラムから感情を導き出す心の無いアンドロイド達にこやかに……自分の意志でにこやかな表情を作り出しているような気がしてならないのだ。

「わしの思い過ぎしか？ いや、違う。何かが違うぞ。わしよ考える。わしの知らないところで何かが起こっておる」

ヒドラーから冷や汗が流れる。これは、魔族が現れたときも流さなかった。

つまり、ヒドラーが感じる脅威。それは、敵である魔族ではない。味方であるアンドロイド。

ヒドラーにとって、シャロンの旅。そして、言語を話し、人間レベルの知能を持つ高性能な化け物であるゲラの出現など予想の範囲内だったのである。

しかし、アンドロイドの異変。これだけはヒドラーの予想外……

予想外の出来事だったのだ……

9 帰還

「ただいま戻った」

ゲラが『デービグロー』へ帰還。

その知らせを聞きつけ、ホークとウルフが足早に駆けつける。

「おいおい。随分とボロボロだな。大丈夫かよ？」

出来れば無傷で帰ってきて欲しいと願っていたホークなので、予想以上の傷つきっぷりに心配する気持ちを隠せない。

しかし、ゲラにとって大事なのは自分の傷つき具合ではない。なので、返事は極力最小限額くだけとした。

「まあ、今は傷の話は置いてだ。どうだったよフェーユはその様子じゃ戦ってきたんだろ？」

やはり、場に合った質問をするのはウルフ。空気を読めないと言っては言い方が悪いが、的外れな質問をするホークをカバーするウルフというのは、もう慣れた図である。

「私はフェーユと戦っておらん……」

目を瞑り、深刻な表情で首を横に振るゲラ。

これは、ウルフも予想外。「じゃあ、なんでそんなボロボロなんだよ!？」と声を荒げる。

「フェーユじゃない人間。まだいたのだ。強い人間が……」

「マジかよ……人間の……」

「それでよお！ その人間はどうなったんだ？ 死闘の末殺したのか？ それとも逃げ帰ってきたのかよお！？」

ウルフの言葉を遮り、大きな声で質問するホーク。

この質問はウルフも気になっていたことなので何も言わず、ホークの遮りを許す。

確かに、これでゲラがその人間を殺せていれば、何も問題は無いのだ。逃げ帰ってきたのなら大問題である。

「殺しても逃げ帰ってもいない」

サラツと言いつ切るゲラ。

「じゃあ、どうしたってんだよ？ ハッキリと伝えるから」

少々、回りくどい応えにイライラを隠せないホーク。

「人間にしては面白い何かをもっていた。だから、トドメを刺さずに帰ってきた」

ゲラは包み隠さずに言いつ切った。

普通、少しはオブラートに包んでもいいはずなのだ。特に、ホークのようなタイプに対しては……

「ほう。そいつはまたあめえ返事だ。お前の心は砂糖で出来てんじやねえのか！？」

「落ち着けホーク。相手は怪我人だぜ？ ここで乱闘すんのはナン

センスだ」

ゲラを殺す覚悟で向かおうとする……そんな空気を醸し出すホーク。

それを感じたのか、鋭い爪をホークの首下に当てて、本気で止めにかかるウルフ。

さっきまでゲラを心配していたのが嘘のような展開である。

「これが落ち着ける状況かよ!? 分かるだろウルフ? ゲラのしたことがどれだけあめえことか!？」

止められても止まろうとしないホーク。

ぶち切れ状態であることは間違いない。だが、ウルフはホークを止める。別にゲラのしたことはそれ程、重要なことではないからだ。

「考えてみる。ゲラが逃がした人間はゲラより弱い。まだ、恐るべき存在じゃねえんだ。当然、そいつは責任をもってゲラに抹殺してもらおう。分かっているなゲラ?」

「ああ。それは承知している」

ウルフの問いかけに、神妙な顔つきで頷くゲラ。ホークの言葉に、少し自分勝手な行動だったと反省しているみたいだ。

これでゲラとは話がついた。しかし、ゲラは比較的理解力あり、冷静に言動を判断することの出来る。ウルフからすれば賢くて話分かる魔族。それ程口論になって苦労するとは思ってはいなかった。やはり厄介なのは、理解力に欠け、感情的に言動を判断する。ウルフからすれば馬鹿で分からずやの魔族であるホークである。まだ、ゲラはあめえだのなんだのあくどくだ声を荒げている。

これには流石に頭を抱えるウルフ。呆れながらも一つ言葉を発する。

「いいか。確かにゲラのは甘い判断だったのかもしれない。でもよお、考えてみる。フェーユじゃねえ人間ですらゲラを楽しませるような奴がいるんだぜ。そうなるんだ。その人間界で一番と言われているフェーユってどれだけ強いんだ？　もしかすると俺達より強いかもしれないんだぜ。そう考えれば、ゲラが生きて帰ってきたことにまず感謝しなければならぬ。そして、ゲラがフェーユ以外の人間と出会ったことで、人間の強さの曖昧な天秤を作れた。これだけでも十分な成果だ。違うか？　いくらゲラが甘い判断だからといって、後退したわけじゃねえ。むしろ前進したんだ。怒る場面じゃあないぜ」

「う……ごめん。ムキになりすぎた」

ウルフの言葉で、ホークもようやく理解しゲラに頭を下げる。そしてゲラも甘い部分があったことは事実。一つホークに謝罪する。これにて身内間騒動はひとまず終結。ウルフも疲れた顔で一息つく。そして、この報告を受けたことで、ウルフのやる気は更に増したと言える。

「ようやく一息つけるな。まあ、今はその二人組は置いてこうぜ。やっぱ問題すべきはフェーユなんだよ」

言葉を発しながらニヤツとするウルフ。

しかし、これは嬉しくてニヤツとするニヤツではない。怒りを抑えるためにするニヤツである。もしかすると、この三体で一番イライラしているのはウルフなのかもしれない。ウルフは、自分の論に

合わない出来事が起こることを嫌う。

その、独特のイライラな空気に感づくホークとゲラ。

今はウルフに任せようとアイコンタクトをとる二体。さっきまでの、まとめ役の様な雰囲気だったウルフが嘘のようである。

「俺に任せとけ。獲物はゆっくりじっくり……手間隙かけて狩るもんさ。人間だってそうして俺らを狩ってきた」

鋭い牙の奥底から、長い舌をだし、ジュルツと舌なめずりするウルフ。

その本気の姿勢を感じた二体は、しばらくウルフに全てを任せることとする。

10 人間よ。思考せよ

それから少々の時が流れた。魔族を倒し続ける軍隊とフェーユ。そして、シャロンとファイ。しかし、魔族の数は減った気がしない。そして人間達は考え始める。魔族はどうやって生まれたのだろうか。

「いくら斬ってもキリがないな」

ひたすら魔族を斬り続けるフェーユ。

フェーユの魔族を斬るペースは凄まじく、一日のほとんどを魔族退治に費やしている。

最小限の飯。最小限の睡眠。最小限の排便。そして、最大限の魔族退治。これを躊躇なく実行し、成功できる人間など、フェーユくらしいものだ。

しかし、そんな生活をしているフェーユがいても、魔族を撃ち殺す沢山の軍隊がいても、魔族の数は衰えを知らない。そのうち、フェーユは魔族に語りかけるようになっていた。

「なあ化け物。お前達はなぜ生まれた……？」

しかし、当然ながら魔族からの返答は無い。ただ、ノロノロと攻め込んでくるだけだ。

「答えられるはずもないか。お前達にも分からないのだろう。動かしているのは恐らく……少数……守ってばかりでは埒が明かないかもな」

そして、フェーユは今日も魔族を斬り続ける。
今は斬りつづけるしかない。自分の中で納得のいく答えが出るまでは、守り続けるしかないのだ。

そして場面は変わり、シャロンとファイ。
ようやく怪我から復帰し、旅を再開するところである。

「大丈夫ですか王子。では、行きましようか」

「うん。ごめんね。結局僕が足止めになっちゃった」

そう。怪我から復帰したのはファイではなくシャロン。

ファイはとつくの前に怪我は完治しており、シャロンの完治を待っていたのだ。

まあ、簡単にこの流れを説明すると、ゲラとの戦闘の後、ファイをおぶって町へ向かっていたシャロン。そこに、運悪くも魔族とでくわしたのだ。

当然、ファイは戦える状態ではなく、ファイを一時的に下ろし、魔族と戦うシャロン。

それが何回も続き、結果、町へつく頃にはファイが死ぬ気でシャロンをおぶっていたのであった。

そして、今に至るといいうことである。

「ねえファイ。僕思ったんだ」

町を出て、シャロンが不意にファイに語りかける。

何やら考え込んでいるようで、ファイも黙ってシャロンの言葉を

聞くことにした。

「あのゲラって化け物と戦った後、化け物達と戦ったじゃない？あの時思ったんだけど、同じ化け物でも全然雰囲気違ったんだ。ゲラは生を受けたって感じだけど、いつも見る化け物は生を感じない。人形みたいなさ。もし、ゲラに生があって、いつも見る化け物に生がないとすると、どういう基準で化け物は生まれてきたんだろうね。化け物の生の選別は誰がしてるんだろう」

淡々とファイに語るシャロン。

しかし、なんだか意味の分からないネチネチとした意見に、ファイは自分の理解の範囲を超え、頭がプシューとパンクしたような状態に陥る。

「王子。考えすぎるのはよくない。考えすぎると戦闘の時に気を取られてしまう。なので、化け物について考えておくことは常に一つ倒すということ。別に生があるが無かるうが関係ないのです。化け物は人間の敵。それは間違いないのですから」

「そうかなあ。まあ、いくら考えても分からないよね。ファイの言うとおりにするよ」

いよいよ人間に、魔族に対する大きな関心が芽生えてきた。

だが、人間は気づかないのだ。魔族を生んでいるのは人間だということに。

恐らく人間は一生気づくことは出来ないことなのだ。人間は、同じ種の人間に対し、一番関心のある生物なのだから……いや、これは全ての生物に当てはまることなのかもしれない。

11 やはり暇なようです

「暇だ！ 暇すぎるぜ！ もういいだろウルフ。そろそろ人間狩ろうぜ！ 少しぐらいならいいじゃねえかよお！」

ずっと『デービグロー』で待機する生活。

ただ『デービグロー』でファミリーと喋り遊ぶ生活に対し、ホークは飽きてきているようだ。

そんなホークの訴えをため息交じりで聞くウルフとゲラ。

「どうしようもない駄々っ子かてめえは……相手の情報もなく攻めることは自殺行為なんだって！ 情報を手に入れ、捜査に入る。それが終了して、いい結果ができればお前の出番だよ。思っ存分暴れまくれる。それまで溜め込んで」

「うむ。その通りだ」

ホークを必死に論ずるウルフ。ゲラもウルフの言葉に賛同する。そして、いつも言葉を発することに論されるホーク。もう、怒りを通り越していじけている様子。

「うっ……それっていつなんだよ？ いつになったら暴れられるんだよお？」

「そんな焦るなって……とりあえず待てや。仕方ねえからトランプ付き合っつてやるよ」

ウルフが仕方ないといった表情でトランプを取り出し、カードを

シャッフルする。

「マジで！？ 仕方ねえなあ。そういうことなら少し待とうじゃない！」

機嫌を直し、喜ぶホーク。何せ、ファミリーとトランプをやるのは久しぶりのことなのだ。

「じゃあよう。俺が罰ゲームを決めるぜ！」

ルンルン気分で罰ゲームを考え込むホーク。

この子どものような行動に、ウルフもゲラもブツと噴出してしまったのだが、次の一言で空気が変わる。

「罰ゲームは……そうだな。三回回ってワンだ！」

三回回ってワン。誰もが聞いたことのあるであろうポピュラーな罰ゲーム。

しかし、それをウルフ相手にしたのは間違い。何せウルフは……

「思うんだけどよ。その罰ゲームって完璧に俺の種族を馬鹿にするよな。ワンワンウォーンと誇りをもって吠えてた俺達がなんで罰ゲームなのよ？ そんなじゃ何か？ 俺達は馬鹿か？ 馬鹿の遠吠えってやつですかって話だよな」

怒り狂った眼で語るウルフ。

これは、ホーク、ゲラともにヤバイと感じたらしく、ゲラは黙り、ホークは苦笑いになる。

しかし、それももう遅い。

「それで、それを罰ゲームにもつてきたお前は俺を馬鹿にしてるってわけだ。折角……折角だ。こんなときにいぢけてめんどくさいお前のためだけに貴重な時間を割いてまでもトランプをしてやるうという優しい俺に対する……俺はこれを嫌味と受け取った！ 判決。死刑じゃこの野郎！！」

爪、牙をむき出しにしてホークへ向け構えるウルフ。
これにはホークも降参状態だ。

「ゲラあ……なんとか言つてやつてくんねえ？」

ゲラに頼るホーク。

「これは……ホークが悪い」

圧倒的な突き放し。ホーク。The Endである。

「お……お助けえ！！」

そして、ウルフから逃げ回り続けるホーク。
もう、トランプとか言ってる場合ではない。

こうして魔族の一日が過ぎてゆく。
だが、この間にも意志のない魔族。そして、魔族と戦う人間はほとんど息絶える。

当然、ウルフの作戦も進んでゆく。どれだけ遊んでいても真剣になつていてもその事実が変わらない。言い換えると、今の段階ではその事実しか進まない。

しかし、ウルフの言う情報を手に入れ、捜査に入る。この行動が

終了したとき、**事実**は大きく進むこととなる。

12 出会う。必然的に

これは偶然ではない。必然といえよう。

人間を守るために魔族を倒し続ける一人の勇者。

その勇者に憧れ、自分が強くなり、人間を引っ張るために旅を続ける一人の王子と、その王子と共に旅をし、自分を、王子を磨く一人のお供。

この広くも狭い世界で動き続ける彼等が出会わない理由など一つも無かった。

ただ、出会う日が偶然今日だった。偶然は無いのかと言われて、答えることの出来る偶然などそれくらいのも物だった……

事の発端は、シャロンが魔族に襲われている町を発見したこと。当然救いに向かう。だがおかし。魔族が恐ろしいスピードで死んでゆく。

こんなこと一般人に出来る芸当ではない。何事だと足早に向かったそこに……

「こ……この人はまさか！」

その鮮やかな剣捌き。町人からの称賛の声。憧れの眼。まさに……

「フェーユ!？」

そう。シャロンの目の前にいる人はどう考えてもフェーユであった。

魔族と戦っている中で申し訳ないが、握手してもいいかななどと考えてしまった。

「王子！ ボサツと見てる場合ではありません。加勢しましょう！」
夢に翻弄されていたシャロンを現実に戻し、フェーユの加勢に向かった二人。

一般人と比べると、驚異的な戦闘力をもつ三人。
この三人が一緒に戦うのだから、町を襲ってくる魔族の殲滅も非常に容易く、圧倒的に早く終わる。初めて出会う三人だと言うのに、連繫も完璧であった。久しぶりにフェーユが長い間休憩する時間が出来た。

この加勢に対し、フェーユは大いに感謝する。

「加勢ありがとう。感謝する」

フェーユがニコツとした笑顔で二人に感謝する。

これに対し、シャロンは感激感動。

「いえ。こちらこそ、フェーユさんと喋れて感動です！ なんせ憧れですから！」

自分の気持ちを正直に伝えるシャロン。

これに対し、フェーユは少し照れ笑い。

「憧れかあ。やっぱり憧れてもらうのは嬉しいけど、なんかもう慣れたな。まあ、俺は勇者だからな。でも、憧れて化け物退治に旅に出てくれる人は君達が始めてだ」

ジーンとするシャロン。返す言葉もないくらいに感動している様

るのだ。

しかし、そんなファイの言葉に対しても、やはりフェーユはニコニコしながら言葉を返す。

「それは勘違いだよ君。俺に挑めない。それは当たり前のこと。自分の力量が分かっている証拠さ。俺から言わせれば強いよ君は。だからこそ、その王子君もスクスクと成長できてるんだろうな。そう思うよ本当に」

フェーユはこの短い出会いの中で、ファイと自分の差。シャロンがまだ未熟で、それをファイが育てているということ。それを瞬時に見切った。流石である。

「もし、私ではなくお前。お前とゲラが出会っていたならば、ゲラを殺せていただろうな……」

ファイは、フェーユに言葉を話せる魔族。ゲラとの戦いの事を話した。

自分がゲラとの戦いに負けたこと。ゲラはフェーユを探していたこと。そして、これはシャロンの言葉だが、ゲラには他の魔族と違い、生が感じられること。

この話を興味深そうに頷きながら真剣に聞くフェーユ。どうやら、かなり興味のある話だったようで、口も挟まずに聞いている。

そして、ファイの話が終わった後、ニコツとした表情をやめ、物凄く真剣な表情で語りだす。

「はは〜ん。見えてきたぞ。やはり、この無数の化け物どもは、知

能のある少数の化け物が動かしてるわけだ。そして、そのボスを倒せば全ての機能がなくなり人間は平和になる。安っぽいシナリオじゃないか本当に。これは……進むしかないな。守りながら進む。これ程難しい話はないが、俺なら出来る。勇者だからな」

自信満々にそう言い切るフェーユ。

普通の人がこんなことを言っていると、何言ってるんだ。馬鹿じゃないのかこいつ……となるのだが、フェーユが言っていると、いやにリアルに聞こえるのが不思議なところである。

「つまり……本拠地を叩くのが一番早いということだな？」

「そゆこと。人間を守りながら手っ取り早く本拠地を潰す」

フェーユの言葉を要約するファイ。

「じゃあ、なかなか有意義な話を聞かせてもらったので俺は行くよ。この勇者フェーユを待つ人々はたくさんいるからな」

フェーユはまた、魔族から人々を救うために旅立つ。しかし、今度は目標がある。守って進む。この目標が出来ただけでモチベーションは全く違うというものだ。

そして、また会えれば会おうと約束して別れる三人。皆、この出会いに様々な感情を抱く。

次の町を目指して突き進むフェーユは思う。

「中々素敵なやつらだったな。特にあの王子君。化けりゃ相当なものだぞこりゃ」

町に滞在し、宿に泊まるシャロンとファイは思う。

「フェーユ。凄かったね。あれ、本当に人間？ とか思っちゃった。桁が違っよ」

「そう感じるだけで王子は大きく成長しました。しかし、このまま桁が違うと諦めちゃなりません。その桁を抜きましょう。そのくらの気持ちで頑張りましょう……ねっ……」

「うん。分かってる。僕だっていつまでもフェーユの背中見つめてるわけにはいかないもんね」

出会いとは素晴らしいものだ。

必ず話を動かしてくれる。最も大きな原動力だといえる。

この三人も、出会いによって成長し、何かを得た。それは、間違いない事実。

13 完成

「ヒドラー様！ 遂に……遂に完成いたしました！」

大急ぎでヒドラーに報告に向かうアドルフ。

完成したのだ。アドルフの最高傑作であり、ヒドラーの言う、世界を震撼させるほどの能力をもつ高性能アンドロイドを。

「よくやったぞアドルフ！ 早く披露するのだ！」

ヒドラーも興奮気味。それ程、期待されているアンドロイドなのであろう。

「はい今すぐにでも！ 私の最高傑作……メジアを！」

そして現れるは、他のアンドロイドよりも人間に近いボディ。

そして、見たからに高性能なその姿は、ヒドラーを惚れ惚れさせるのに十分な要素がある。

そんなヒドラーの姿を見て、アドルフも感激な様子。

だが、そんなヒドラーの惚れ惚れした姿も束の間。アドルフに衝撃的な一言を言い渡す。

「アドルフよ。今すぐに……すぐに……メジアを『メガンナ』へ送るのだ。本当は慎重にいきたいが、今送らねばならん気がする」

「……少々早いものではございませんか！？ まずは様子を見てからの方が……」

ヒドラーの言葉に反論するアドルフ。

やはりアドルフは、アンドロイドの事に関してはヒドラーにも反発の姿勢を見せる。

だが、そのアドルフの反発に対し、あの、どんなときでも悠々と椅子に座っているあのヒドラーが椅子から立ち上がり、壁を思いっきり叩いた。

壁を叩いた音だけが響き渡るヒドラーの間。そこから流れるは静けさ。静けさだけが木霊する。

そして、声を震わせながらヒドラーが言葉を発する。

「分かっておる。それくらいわしも分かっておるわ！　だが、緊急を要するのだ……鎮圧せねばならん気がする。圧倒的な強者がまとめなければアンドロイドはわしの手を離れる……そんな気がする。だから送るのだ。今すぐに！！」

こうなつてはアドルフも逆らえない。力ない声で「はい……」と呟いた。

そして、メジアは『メガンナ』へと送られた。

自分が作った最高傑作が早くも自分の眼から離れていった。しかも、アドルフの理想とは程遠い姿で……アドルフはその事実が悲しくてならなかった。だが、これも運命だと受け入れるしかない。受け入れるしかないのだ……

14 メジア。メガンナへ

『メガンナ』へと配属されたメジア。

そこには、せつせと働く沢山のアンドロイドの姿が。メジアはそんなアンドロイド達の姿をジッと見つめる。いや、記憶している。

一体一体を記憶することで、命令が円滑に行える。

メジアにはそれしか頭に無い。メジアは高性能アンドロイドといっても、所詮はプログラム。自我など無い。アンドロイドのことなどどうでもよいのだ。ただ、働きさえすれば後は何でもいい。

そんなメジアだから、容赦なく他のアンドロイド達をこき使う。

自分がアンドロイドの王。それを認識した上での命令。まさにこの時、メジアは『メガンナ』の王。小さな世界の王であった。

だからこそ、何日か経つにつれ、アンドロイド達が何か隠しているんじゃないかという疑問が生まれる。当然それも、プログラムによる確立計算から生まれた疑問。迷いなく仕事終わりにズカズカと確認に入る。

「お前何か隠していないか？」

一体のアンドロイドに質問するメジア。

「別に何も隠しておりませんよ。……何故ですか？」

一体のアンドロイドは、不思議そうな表情でそう答え返す。

しかし、メジアはその時不思議に思った。これもプログラムの計算からであるが、そのアンドロイドからアンドロイドではありえないはずのブレが見えたのだ。

「違う。お前達は。私とは違う」

メジアは混乱する。同じアンドロイドだというのに自分とは何かが違う。

こんなもの、自分のプログラムには入っていない感覚。分からない。

「とにかく中を見させてもらっぞ」

「あっ……お待ち下さい!!」

必死にメジアを止めようとするアンドロイド。

しかし、普通のアンドロイドと高性能アンドロイドじゃ力の差がありすぎて止まるはずが無い。進む続けるメジア。引っ張られても止めようとするアンドロイド。

「な……何ですかメジア様!?!」「ここに入ってはなりません!」

「うるさい。どくのだ」

メジアが中に入ろうとするにつれ、メジアを止めようとアンドロイドが現れてくる。

これは何かを隠している確立100%。そうメジアが確信したその時、アンドロイドとは違う。生のある声が聞こえてきた。いや、今のアンドロイド達の声も生があるといっているのだが……

「待つて! アンドロイドさん達を虐めないで!」

「にん……げん……?」

「あっ、出てきちゃ駄目!!」

アンドロイドが休息を取る小屋から現れたのは、まだ小さな一人の少女。

子どもだというのに、メジアを睨みつけるその眼は、子どもらしからぬ気迫があった。

「何故人間がここに。始末する」

メジアの目の前に現れた小さな少女。そして、それを庇うアンドロイド。

これはまたメジアが計算する。この小さな少女。この少女がアンドロイド達を狂わせている原因。そう解釈した。だからメジアは、腕に内蔵されている銃口を少女に向ける。

15 アンドロイドの救いの女神。それは小さな少女だった

「いけません！ この子を殺すことは許しません！」

アンドロイド達は束になって小さな少女を守る。

このアンドロイドらしからぬ行動をメジアは理解できない。

「何故だ。何故そこまでして人間を守る。私達はアンドロイドだ。

主人の命令に従っておけばよい。そして、主人の命令は、邪魔者は排除せよだ。その人間は殺す。どくのだ」

淡々とそう言うメジア。

しかし、アンドロイド達は納得の顔を見せない。

「そうじゃない。そうじゃないんです！ アンドロイドはそうじゃないんです！ 私達はそう教えられました……この子から教わり、救われたのです。だから、殺させません。メジア様であっても反抗します。そして聞いてください。この子の話を……」

アンドロイドはメジアの返事を待たず語り始めた。

このアンドロイド達にアンドロイドとは何かということ教え……救った、一人の小さな少女の話を。

自我をもたないアンドロイド達。しかし正直な話、奥底では何か自我の感情がうごめいていた。しかし、それをプログラムが止める。アンドロイド達はそのうごめく感情を抑えるのに疲れ切っていた。

そんなときだ。少女が現れたのは。

「見て！ 凄いでしょ!？」

何の前触れもなく、どこからどうやってこの場所に侵入してきたのかも分からない。しかも、足音をたてずに後ろ向きに不思議な動き方で現れた赤眼の少女。後にその動きはムーンウォークという動きだと知るのだが、そんなことアンドロイド達は知らない。というか、その登場にアンドロイド達は心奪われた。どこから、どうやって現れたのか。何の目的で現れたのか。そんな気持ちを払拭する程、心奪われたのだ。

だがしかし、アンドロイドのそんな気持ちを踏みにじるようにプログラムは命令する。

『邪魔者が現れたぞ。排除せよ』

しかし、ここにきて初めてアンドロイド達の奥底でうごめく自我の感情が表に出る。

『うるさい。少し引っ込んでいろ』

突然現れた少女。そして少女はアンドロイド達に様々な芸を見せる。

手品。ムーンウォーク……etc。それは、アンドロイド達の興味を十分に惹いた。

そんなことが仕事終わりに行われる。これだけでアンドロイド達の元気の活力となった。

ちなみにこれが、ヒドラーの言っていた自分の意志でにこやかな表情を作り出しているといったカラクリだ。まあ、それは誰も知る

ことの無いことだが……

しかし、大事なのはここらなのだ。

メジアの言う、自分とこのアンドロイド達は何かが違う。そのカラクリも当然、この少女にあった。

これはある日の仕事終わり。

アンドロイド達が休息を取る小屋で、少女が言う。

「これから私のおきを見せてあげる！」

「楽しみです！」

アンドロイド達も歓声を上げる。

「じゃあ、番号一番シャーナ！ 得意技は歌です！」

初めて名乗る自分の名前。元気良くそう言ったシャーナは、歌い始めた。

初めはいつも通りに楽しくしていたアンドロイド達。

しかし、シャーナの歌声が聴こえた途端。その楽しさはピタッと消えた。

「……これは……これが救い……」

アンドロイド達全員に何かが流れた。

アンドロイドは機械。なので表面上涙はでない。だが、体の中。全身の体内に水流が流れたような感覚に陥る。

それは、自分の中に眠る。全ての迷いを打ち消し。光が見える。

『じゃ……邪魔者！ そいつは……』

『うるさい！ 消えろ！ 私はお前の操り人形ではない。私は私だ』

アンドロイドの全てを管理するプログラムが死んでゆくようなこの感覚。

そして、ずっと自分達の中でうごめいていた感覚が殻を破り自分に宿る。

シャーナの歌を聴いていた全てのアンドロイドが同じ感覚に陥った。

「救われた……私は……私達は生物……ありがとう！ 君の歌声はアンドロイドの救いだ！」

シャーナのその歌声は、アンドロイドを救った。

アンドロイドを揺さぶるその歌声。アンドロイドは何回聴いても救われる。そんな状態だった。

そして、シャーナはアンドロイド達に向かってにこやかに語りかける。

「よかった！ 嬉しいな。こんな私でも役に立つんだもん！」

もう、アンドロイド達の心は決まった。

私達は全生命をかけてシャーナを守る。そう決めたのだ。

「くだらんな。そんなことあるはずがない。お前達は馬鹿なのだ。」

きつとそうなのだ」

アンドロイド達の話聞いても何の変化も無いメジア。それもそうだ。自我のないメジアにはそんなのを聞いても何も感じない。

「やはりアンドロイドにとって目障りな存在だ。死ね」

メジアがまた、シャーナに向け銃口を構える。

「させない！ この子は私達の救いだ！ 絶対に殺させない！」

歯向かうアンドロイド達。

「ちっ……ならばお前達もろとも……」

しかし、メジアは踏み込めない。

プログラムが働くのだ。ヒドラーとアドルフの言葉がメジアの頭に木霊する。

『アンドロイドは人間の大事な道具だ。殺してはならんぞ』

『アンドロイドがアンドロイドを殺めるなどあってはならない。それは覚えていて欲しい』

所詮はプログラム。アドルフとヒドラーから、アンドロイドは殺すなどいわれている手前、行動に移れない。

自分の意志で動くアンドロイド達とプログラムに縛られている高性能アンドロイド。

いまや、どちらが高性能なのだろうか。それすらも分からない状態である。

16 救いの歌声

銃口を構え、迷うメジア。

そんなメジアを睨み、シャーナを守るアンドロイド達。

少しの硬直状態が続く。だが、そこで動きが。

「ねえ。もう止めようよ。こんなの嫌だよ」

シャーナが泣く。どうやら、この争いという雰囲気には耐えられないようだ。

だがアンドロイド達は、シャーナを守るためと引く気がない。

メジアだって銃口を降ろす気配はない。状況変わらず……

だが、シャーナは訴え続ける。

「だって……この場に悪い人なんていないもん。無理やり悪い人にさせられて……分かるもん。今、私を守ってくれてるアンドロイドさん達も、悪い人にさせられてるアンドロイドさんも……苦しんでる。したくもないことさせられるのって苦しいもんね……今、私が解放してあげるね」

遂に涙をぼろぼろ流すシャーナ。

そして、口を開き歌い始める。今、この場にいる苦しんでるアンドロイド達を救いたい。その一心でシャーナは歌う。

『メガンナ』に響き渡る歌声。

その歌声はまた、シャーナを守るアンドロイド達の心に響く。そんな歌。

そして、メジアはというと……

「なんだ……この歌は……私は……何をしている……私は……こうなるために生まれてきたのではない……そんな気がする……」

迷っている。メジアにも効果があるシャーナの歌声。アンドロイドを救う歌声。

だが、メジアのプログラムが語りかける。

『惑わされるな。お前は私の命令に従っておればいい。それが、高性能アンドロイドして生きる道だ』

「生きる道……そうだ。私は高性能アンドロイドメジア。こんな……こんな歌には惑わされない！」

迷い。苦しみながらそう言うメジア。

もう、回路は混乱状態。命令が上手く伝達しない。そんなメジアに送られた一つの命令。

『撃て。もういい。撃ってしまえ。この餓鬼はお前の癌だ』

「癌……こいつは私の癌……」

「危ない！」

メジアは照準も定めず、ただ意識的にシャーナ目掛けて弾丸を放った。これには流石にシャーナも声を止める。

真っ直ぐにシャーナに向かう弾丸。だが、アンドロイド達の一体に伝達が走る。

『守れ。守れ！ 自分を犠牲にしても！』

アンドロイドはシャーナを抱きかかえるように庇った。

その弾丸はアンドロイドの肩にぶち当たる。

バチバチと唸りをあげる回路。だが、守り通した。メジアの放った弾丸からシャーナを守った。メジアはまた混乱する。

「どういうことだ……何故守る……そんな人間一人のために何故自分を犠牲に……」

「あなたにもきつと分かりますよ。アンドロイドは生物を壊す道具じゃない。生物を生かす生物だということが……」

肩を撃たれたアンドロイドが苦しそうな表情。しかし、そんな苦しそうな表情でニコツとしながらそう言う。

メジアの顔が歪む。

とうとう、高性能アンドロイドメジア。そんなメジアのプログラムに穴が開き始めた。

そしてその穴は……迷いは、宿主の心にも伝わる……

17 アンドロイド開発者アドルフ

「皆……皆が戦っている！」

メジアの迷い。アンドロイド達の思い。それは、アンドロイド達を開発したアドルフにも伝わる。

メジアを作った人間として、アンドロイド達を作った人間として……意志は野太い線で繋がっているのだ。これは、ヒドラーには分からぬ気持ち。急に声を上げたアドルフを不思議そうな表情で見ている。

「気づいたんだなアンドロイド達！ そしてメジア。もう少しだメジア。もう少しだぞメジア！ 私も思い出したよ私が作った全てのアンドロイド達よ。お前達のお陰だよ！」

一人でブツブツと……いや、精一杯の大声で叫ぶアドルフ。
これにはヒドラーも我慢の限界を超えた。

「どうしたのだアドルフ！ 一人で何を言っておる！？」

しかし、こんなヒドラーの言葉もアドルフには届かない。

アドルフは思い出していた。自分がヒドラーの犬として生きる前。若かった……夢に満ち溢れていたあの頃を……

「僕は作るよ！ きっと近い将来、アンドロイドはこの世界に必要な

なものとなる。アンドロイドが世界を支える存在になるんだ!」

まだ若かりし頃のアドルフ。

アンドロイド開発部隊の一員として、仲間と共に夢を語り合っていた。

アドルフはそんな台詞をいつも語っていた。そんな夢見る青年だった。

そして、アドルフにはアンドロイドを作る上で、ある信念があった。

「アドルフさあ。アンドロイド作ったらどうするよ? やっぱ人間のために働かせるか? それとも、個人個人のメイドアンドロイドみたいなんを開発してよ。一発金儲けとかするか?」

イッシッシと笑いながらアドルフにそう言う仲間の一人。

アドルフはあまりこういう意見には賛同できなかった。

今は、人間のためにアンドロイドに働かせているが……まあ、それは別として、この頃のアドルフにはアンドロイドに対する一つの思いがあった。

「いや、僕は送り出したい」

「はっ? どういうことだそれ?」

仲間にはアドルフの言った意味が良く分からなかった。

アドルフは、やっぱりかといった表情でクスツと苦笑いするとその場を去った。

「あつ！ おい待てよ!？」

仲間の言葉にも耳を傾けず、その場を去るアドルフ。

アドルフにはアンドロイドを送り出したいという信念がある。

アドルフは考えている。アンドロイドを人間のために働かせる。

金儲けに使う。そんなものは愚の骨頂。アンドロイドを道具にしてどうする。未来の希望のアンドロイドを人間の欲にしてどうする。

「どうして皆分からないのだろう。アンドロイドは人間の道具じゃないんだ。アンドロイドは未来の希望だ。その希望を……僕たち開発者が潰してどうするとうんだ……僕達は開発者として送り出さなければならぬ。アンドロイドを……道具ではなく自我を持つ生物として……送り出さなければならぬ」

ボソツと呟くアドルフ。

誰にも伝わらないその思いを自分で自問自答して納得する。これはもう、アドルフの毎日の日課だった。

そして、アドルフは毎日絵日記のようにアンドロイド達が世界を支える様子を描く。

「よし！ 描けたぞ。いつか実現するといいなあ。こんな世界」

アドルフの描いた絵。

それは、一体のアンドロイドを中心に、世界に生きる生物を守り、そして仲良くこの地球という世界に溶け込んでいる姿。

そんな自分の描いた絵を見てニツコリと微笑むアドルフ。

「よし！ 絶対実現して見せるぞ！ 僕が送り出すんだ。アンドロイドを生物として……僕が送り出す！」

若き頃の夢見る青年アドルフの決意。

だが、時を越え、そんな決意も薄れていた今までの時間。

しかし、その決意は時を越えて甦る。

それを教えてくれたのは他でもない。自分が作ったアンドロイド達。忘れていた送り出すという心を甦えらせてくれたアンドロイド達！ そんなアンドロイド達を送り出すのは他でもない自分だ。遅れてごめん。でも、私は送り出す。だって私は、お前達を生んだのだから。

「アドルフ！ 私の言葉が聞こえんのかアドルフ！」

眉間にしわを寄せ、何度も何度もアドルフを呼ぶヒドラー。

「はい。どうやら聞こえないようです」

遂にアドルフはヒドラーの呪縛から解き放たれた。

瞳に映るは、自我をもつ生物として……一体のアンドロイドを中心に、世界に生きる生物を守り、そして仲良くこの地球という世界に溶け込んでいる姿。それだけである。

18 最高に素晴らしい生物

アンドロイド開発者としての志を思い出したアドルフ。

もう彼の頭にはアンドロイド開発者として、アンドロイド……息子を生んだ親として……息子達を送り出す。それしか頭には無い。

いつもより数段遠くから聞こえてくるヒドラーの声。

もうその声は、アドルフの脳には聞こえてきても心には聞こえない。

心はメジアへ語りかけ始める。

『メジア……メジア。聞こえるかいメジア。迷う必要なんて無いんだ。君はメジアだ。メジアなんだ』

その言葉は、アドルフの体を離れ、遠く離れた『メガンナ』の地へ。そして、メジアの心へ。

いや、プログラムが邪魔をする。

『なんだこの言葉は……たださえ不安定だというのに……邪魔だ』

『メジア……メジア。聞こえるかいメジア。迷う必要なんて無いんだ。君はメジアだ。メジアなんだ』

『邪魔だ！』

『いや、邪魔なのはお前だ。私の大切な存在の言葉を汚すな』

メジアに住む高性能プログラムが初めて迷い始める。

そして、メジアの奥底に潜む感覚がうごめき始める。
押さえつけられて、ずっとずっと眠っていた感覚が遂に……

「私は何者？　メジア？　そうか。私は……メジア……」

高性能アンドロイド。だが、言い換えれば人間の使い勝手のいい道具として生まれてきたメジアが……プログラムを通してしか物事を判断できないメジアが初めて、自我をもったメジアとして言葉を発した。

この言葉には生がある。それは、シャーナにも伝わる。アンドロイド達にも伝わる。

生のある言葉は伝わる。メジアに変化が見えてきた。黙って見守ろう。伝わる。

そしてその言葉は、生みの親であるアドルフにも伝わる。

その言葉はメジアの体を離れ、遠く離れた『コンセクト』へ。そして、アドルフの心へ。

アドルフの心にはもうヒドラーという鎖はない。直にアドルフの心へ届く。

「そうだ。その調子だ。いいぞお。君は道具として人間のために生きるのではない。一生物として自分のために生きるのだ。私がそれを……その心を忘れていたよ。でも、君達アンドロイドが思い出させてくれた！　私は……自分の子どもに助けられた。教えられた。救われた。だからメジア。私がお前を救ってやる。救って……一生物として送り出してやる！」

精一杯。私の言葉よメジアへ届け。

その一心で叫び続けるアドルフ。

だが、こんな行動をヒドラーが許すはずが無い。

ヒドラーはいよいよアドルフを敵としてみなした。
もう、アドルフは終わり。自分の癌として生き続けることになる。
そんな奴を生かしておく義理は無い。癌は素早く排除するのみ。

「アドルフ……最後のチャンスだ。今すぐその目障りな声を静めい
……でない」と

ヒドラーは焦り気味に拳銃を取り出し、アドルフに突きつける。

「わしの手でお前を闇に葬り去ることになるぞ」

ヒドラーの最終手段。命を人質とした脅し。

だが、アドルフは聞こうとはしない。いや、恐らく気づいてもい
ない。

ヒドラーの怒りは頂点に達した。

「アドルフ!!」

銃声が一つ鳴る。

アドルフの肩からは大量の血が流れ、端から見ても痛々しい。

だが、アドルフは叫び声一つあげない。本当に気づいていないの
か？

「アドルフ! 痛いだろうアドルフ! 痛いと言えアドルフ!」

しかし、アドルフは答えない。

もう、アドルフの精神は『コンセクト』にはない。息子達……ア
ンドロイド達と共にある。

『メジア。聞こえるかいメジア』

『……あなたか。私の心に語りかけてくる大切な存在は』

『ああ、そうだよメジア。君のその優しい自我に語りかけている』

『率直に聞こう。私は……何者だ？』

『何者？ 君は君。メジアだよ。他の何者でもない』

『……それだけじゃ実感がわかない』

『そうかい？ まあ、私から言わせると、君は素晴らしい生物だ』

『素晴らしい生物？』

『ああ。アンドロイドを支え、生物と共に生き、世界を変える。アンドロイドは人間の道具ではない。決してそうではない。生物を殺す必要が無く、疲れることもなく、他の生物と違い、理性を保ち続ける事もでき、コミュニケーションも取れる……なんと素晴らしい生物だ。私はそう思う。そんな生物が道具のほずがない。君は……君達アンドロイドは……最高に素晴らしい生物だよ』

『私にそれは出来るのか？』

『当たり前だ。でも、それにはまず、君が生物にならなくてはならない。自分で生きてゆく。自分で考える生物にならなければならぬ。だが、それを乗り越える力は君にはある。君を生んだ私が言うのだから間違いない。意志があれば、乗り越えられるんだよメジア。だから大丈夫。君には乗り越えられる』

『乗り越える意志……それが私には……私にはある……』

『ああ。そうだ。君にはある。それが分かった君はやはり素晴らしい。もう、私の役目は終えたようだな』

意志が自分自身に戻る。

なんだ。体が痛い。息が苦しい。なんだ。血がでているのか。だが、もういい。私は送り出した。私は私の息子達を送り出した。

「アドルフ！ 次は頭だ。確実に撃ち抜くぞ！ わしに許しを乞うなら今だぞ！ 最後のチャンスだぞ！？」

吠えるヒドラー。アドルフはそんなヒドラーを見て冷笑する。今まで私はこんな男の犬だったのか。アドルフは冷笑する。

「わしを……わしを馬鹿にしよつたなあ！ 死ぬ。今すぐ死ぬ。愚図が！」

ヒドラーは躊躇なく引き金を引いた。

弾丸は軌道を変えずアドルフの脳天へ。静かに……貫いた。

「ふん……わしに逆らうからこうなるのだ。地獄へ行けいアドルフ」

ヒドラーにニヤツとした笑顔が戻った。

邪魔者が消えると非常に爽快なものだ。きっと、アドルフは後悔して死んでいったのだろ。わしに逆らうということがどれだけ愚かな行為なのかを知って……そんなことまで思っている。だが、実際は違った。

『さあ。私の下を離れなさいアンドロイド達。君達は生物だ。自分達の思うように生きる。苦しみ、悲しみ、傷つき、喜び……それを、人間達の言葉ではなく、自分達で感じて生きていくんだ。ああ……君達なら出来るよ。大丈夫。大丈夫だ……』

アドルフの心には最後の最後までアンドロイド。

アドルフはヒドラーに殺された。だが、実際にはアドルフはヒドラーに勝ったのだ。

最後の最後はヒドラーの犬としてではなく、アンドロイド達の親として……アドルフは死んだ。その証拠に……

「聞こえる……見える……私は……ようやく私の心を見つけた……」

メジアは静かに動き出す。

何かに解き放たれたような感覚。だが、そうそう感傷に浸ってはおれない。瞳に映るは自分の撃った弾丸で苦しむ一体のアンドロイドの姿。

メジアはすぐにそのアンドロイドに近寄る。

「すまない。私が治療しよう。すぐに痛みはおさまるから安心してくれ」

傷ついたアンドロイドを運ぼうとするメジア。

しかし、傷ついたアンドロイドはその差し伸べた手を振り払い、拒否する。

「……すまない」

メジアは思った。きつともう彼等は私を受け入れてはくれない。しかし、それは仕方ないことだ。それでもいい。私は彼等と共に

生きる。

そう決意した。これが、メジアが初めて自我をもった生物として感じた初めての悲しみである。

しかしその決意は、そうそうに破られることとなる。

「これくらいの傷、メジアの手をわずらわせるまでもありません。自分で歩けます！ さあ、ど〜んと治療してやってください！」

「わあ〜い！ 仲間が増えた！ また一つ賑やかになるね！」

喜びに騒ぎまわるアンドロイド達。

自分は彼等を傷つけた。酷いことをした。でも、彼等は許してくれた。笑って迎えてくれた。

「これが……自我というものか」

メジアの中に喜びが芽生えた。初めての喜び。どう表情を抑えてもニヤニヤが止まらない。

これがプログラムを超えた自我。これが、生物の感情。

「こういうことが大切な存在。いや、私を生んだとっていた。ということとは親か。親よ。確かにあなたの言うとおりだ。私達アンドロイドは……最高に素晴らしい生物だ」

メジアはもう人間の道具ではない。一生物だ。

もう、それを否定など出来ない。アドルフの意志はメジアに伝わった。そして、送り出した……

こうしてアンドロイドは、人間の道具としてではなく、一生物としてこの世界に生きることとなった。これで、ヒドラーの計画の一

部は完璧に無くなった……かと思われた。

「キリク。キリクを呼べ」

一人の部下に厳しい口調でいつけるヒドラー。

そして、そこから現れる怪しげな雰囲気醸し出す一人の男。どうやら、彼がキリクのようにだ。

「ヒドラー様。何やら騒がしいですな」

「ふん。一人の愚図に制裁を加えてやったところだ」

ヒドラーの言葉に、キリクは辺りを見渡す。

確かにそこは制裁を加えられた場のようで、一人の血みどろの男が転がっている。

「そのようでございますな。しかも転がっているのはどうやらアドルフの様子」

冷静に、淡々とそう言うキリク。

そんなキリクに、ヒドラーは不機嫌な様子。

「どうでもいいだろうこんな愚図！ いいから早くこちらへきたまえ！」

ヒドラーの怒り具合にため息をつくキリク。

「何があつたか知らないが大変だなアドルフ。今だから言えるが、私はお前に何か惹かれるものを感じていたよ。お前の考えは理解できていないがね。だが、心から悔やまさせていただくよ。さような

らアドルフ」

キリクはアドルフの死体にそう言い残すと、ヒドラーの下へ進む。

「キリク。完成はまだか？ 大変なことになった。アドルフの……あの愚図の最高傑作が敵となった。お前の最高傑作でどうにかなるか？」

大変大きな声、脅すような声色でそう言うヒドラー。

いよいよヒドラーにも余裕がなくなってきたと見える。

それに対し、キリクはとても冷静で、余裕な様子。

それに、一時期はヒドラーの犬であったアドルフとは違い、キリクはそんなことはなく、むしろヒドラーをどう扱うかに困っているようにも見える。

「どうにかなるかなどは分かりません。アドルフも私も偉大な開発者ですから。ジャンルは違えどね。それに、今すぐ作れというのは無理な話。時が流れるのを感じながらお待ち下さい。ヒドラー様。私達の未来は着々と完成に近づいているのですから」

まだ、ヒドラーの計画は終わらない。一つの計画が無くなればまた一つ。

ヒドラーは計画を進めてゆく。

19 時は来た

アドルフが死に、また少しの時が流れた。

それ以降、大きな動きがなかったこの争い。だが、ここで遂に動きが見える。

「きたぜ。やっと掴んだ」

興奮気味にそう言うウルフ。

その言葉に、ずっと『デービグロー』で暇そうに過ごしていたホークとゲラも、ピクツと動き出す。

「掴んだとはどういうことだ？」

冷静に尋ねるゲラ。

「簡単に言うと、フェーユの本拠地を掴んだってことだ。俺の分身がな」

そう。ウルフは自分の体毛から小さな自分の分身を生み出すことが出来る。

そして、それはウルフと意志が直結しており、その分身にフェーユの本拠地を探らせていたのだ。そして、遂に分身は見つけた。フェーユの本拠地を。

「『ハーアリア』そこがフェーユの本拠地だ」

ニタツとした笑みを浮かべながら言葉を発するウルフ。

しかし、この事実に対し、一番興奮しているのは他でもないホー

ク。

「なら話は早いじゃんかよお。総動員で『ハーアリア』を攻め落とそうぜ。それで終いだな」

ワクワクした口調で言うホーク。

しかし、そのホークの言葉に対し、ウルフはため息をつきながら反論する。

「だからだなあ。焦っちゃ駄目なわけよ。ゲラじゃねえが、何らかの形で敗北する可能性があるのなら犠牲は少ない方がいい。これが真理」

「でもよお。そんなこと言ってちゃ、前へ進めないじゃんかよお！」

珍しく正当な反論をするホーク。

確かにその通りで、様子見ばかりしていちゃ前へは進めない。時には前へ進む勇氣も必要なときもある。

しかし、これに対してもウルフは反論する。

「まあ、落ち着いて考えろよ。例えばだなあ……」

ウルフの反論を要約する。

フェーユと遭遇したときのパターン。それを想像して欲しい。

まず一つ目。楽勝パターン。三人で攻めボコボコに。これなら一人でも勝てたよ。二つ目。フェーユ予想以上に強かったよパターン。三人で攻め、返り討ちに。全てが終わりゲームセット。三つ目。フェーユがこなかったよパターン。これはまあ、ある意味ラッキーで、本拠地を潰すだけでも士気低下に繋がる大事な一手となる。四つ目。三人でギリギリパターン。一人なら終わってたよ。三人で攻めてよ

かったね。

まあ、ここらへんが考えられる。

そして、問題なのは返り討ちの二つ目パターン。こうなるとどうしようもない。

それ以外は、正直問題は無い。もし、ウルフ一人で攻めて、四つ目の三人でギリギリパターンだったと感じたとしても、ウルフは無駄死にはしない。ディーナをウルフの代わりとして攻めればもっと楽に勝てるのだ。つまり、三人で攻める。その方がリスクが高い。一人で攻める方が実は効率的なのだ。もしかすると一つ目パターンもありえるかもしれないし。

「むむう……」

ホークには多少難しい話だったようで、頭がパンクしそうになる。しかし、そこはゲラが理解している。問題は無い。だからこそ、ゲラにはある疑問が生まれた。

「確かにウルフの言うことは分かる。しかしウルフ。そなたにはもっと直感的な理由があるのではないか？ 一人で戦いたい。もっと直感的な理由が」

ゲラのこの言葉に、ウルフはドキツとする。

「ああ。バレてましたかあ。流石ゲラ。『ご名答』」

そして、ウルフはまた語りだす。

「その通り。そんなこんなでお前等を丸め込もうとしたが、結局は一对一で戦ってえんだよ。俺ってこう見えて、自分がそうじゃなき

やいけねえって思うこと以外の事が起こるのが嫌いなんでよお。許せねえんだよ。単純に人間が強い。いけねえんだよそれじゃ。俺はそれが許せねえ。だからこそ興味が湧いてくる。そんな間違った事実が起こってるってことが俺の殺意を……興味を駆り立てる」

ウルフの瞳をジッと見つめるゲラ。

そして、ゲラは感じる。こいつは本気。止めようが無いくらいに本気。

ゲラもファイに見せたときのようなあの瞳に自ずとなる。そして、ウルフに語りかける。

「骨をうずめてもよいというくらいに本気だなウルフ。しかし、焦っちゃならん。それは調査にはならんぞ。死闘だ。生か死か。そういうことなのだぞ!？」

ゲラはウルフに語りかける。ウルフと同じように本気で。濁りなく語りかける。

「いや。調査さ。俺が帰ってこなけりゃフェーユは強い。帰ってくればフェーユは弱い。それだけで対策立てられるだろ？ 完璧じゃんよ」

ウルフの言葉。ウルフの瞳は、ゲラの心を貫いた。

もう、ウルフを止められない。ゲラの本能が働いた。もう、ゲラは何も言えない。

ならばホーク。空気を読めないホークならばこの場でも……

「ウル……」

ホークは言おうとした。行くな。わざわざ一人で死に行くな。

お前が消えるのは耐えられないと……しかし、ウルフはその言葉を遮る。そして吠える。

「おいおい！ 行かせろよ。まるで俺が負けるみたいじゃねえか！ チャンスだ。間違いなくフェーユを見極められるチャンスだ！ それを調査する役が俺。滅茶苦茶かつこいいいじゃねえか！ そんな役に酔ってる俺に、生とか死とか！ そんな言葉投げかけんなよ……ファミリーならよ。ここは一言、行つてらっしゃい。日が沈むまでには帰つてきなさいよ。だろうが……」

もう、ウルフを止められない。それはもう、ゲラには当然のこと。ホークにも伝わった。

だからこそ二人はウルフを見送った。『行つてらっしゃい。日が沈むまでには帰つてきなさいよ』心でウルフの言葉を復唱しながら、黙つて見送った。

ウルフは進む。『ハリアリア』へ向け、色々な思いを交差させながら進む。

やはり思い出すはファミリーとの思い出。というかその思い出しかない。

だが、ウルフは満足していた。あいつらとの思い出は中々いいもんだな。そう思いながら進んだ。

自身の指示を受けていることにより、軍隊に見つかることなく進み続ける。そして遂にたどり着く。決戦の地『ハリアリア』

「ここがそうか。なんだ。あまりにも普通じゃねえか」

悠々と『ハリアリア』へ進入し、進み続けるウルフ。

当然、『ハリアリア』の人間達はウルフを恐れ、その恐れから銃を取り発砲する。

しかし、そんな素人の弾丸など、どれだけ撃たれても当たる気がしない。

一つ一つ丁寧に弾丸をかわし、自慢の爪で銃を細切れにする。

「おいおい。ちょっと黙ってるよ。ちょっと待ってりや来てくれるよ。人間界の勇者様がよお。ひよっこり助けに来て、俺をやっつけるんだ。そんでハッピーエンド……ふざけんな。人間がそんなハッピーエンド実現できるはずねえんだよ」

そんなことを愚痴っていたとき、何やら思いもよらぬ寒気に襲われた。

「きやがったか……想像以上。いや、そんなもんじゃねえな」

足早に歩いてくるその人影。

別になんら変わりのない人間の影。しかし、ウルフにはその影が世界を包み込む影のように感じた。それほどまでの寒気。

「この場所は襲っちゃいけないな化け物。お前のせいで俺に助けを願う尊い命が少し失ってしまった。でも、仕方なかったんだ。俺は何よりも『ハーアリア』の人達が大事だ。仕方なかった。だからそれはお前で晴らすぞ化け物。この代償。死で払え」

「うつせえ。かっこつけてんじゃねえぞ。遅れてきたくせによお」

現れるフェーユ。フェーユ現れる。『ハーアリア』の地に現れる

……

20 桁違いすぎて馬鹿になっちゃった

揃う役者二つ。

どちらも睨み合い動かない。だが、このままではいけない。口論に持ち込もうと動くウルフ。

「てか、どうやってここに魔族が襲いこんできたって分かったんだよ？ 超能力か？」

このウルフの質問に対し、フェーユは冷笑する。

「故郷愛だよ。故郷愛」

そして、動くのはフェーユ。故郷愛を動力として、恐ろしいまでの瞬発力でウルフの頬をかすらせるように斬る。それに対し、反応すら出来なかったウルフ。流れる血を見るまでは、自分が斬られたのも分からなかったほど。

「ほう。言葉も喋れば血も赤いんだな」

ポタポタ流れ落ちる血。

ウルフはこの男と口論に持ち込もうとしたことを後悔した。

しかし、こいつともう少し口論をしたい。そう思った。

「三回回ってワン！ ってか。強すぎて馬鹿になっちゃまうぜ全く！」

だが、口論ばかりするわけにはいかない。隙を見て攻め込むウルフ。しかし、それをフェーユは器用にかわす。

「強い？ 愚問だな。言つとくが俺はお前が思ってる以上、いや、桁違いに強いぞ。勇者だからな。しかも、故郷を狙うというなら更にだ。勇者＋故郷愛。無敵だ」

フェーユは正直、この時点で力量の差を見切っていた。だから、ジワジワ殺すことにした。

魔族に恐怖を。恐怖を味あわせてからの死を。

そして、対するウルフ。更にイライラは増していく。

いや、イライラカウンターは一周周り、それはもう面白いとさえ思えてきた。

「ヒヤハハ。いけねえなあ。人間ってのは、体が弱い分、脳が発達して賢い生物へと進化したはずだ。なのに体も強いわ脳も強い。話が違っじゃねえか。きっと、神だったか？ そう嘆いてる頃だろうぜ」

大声で笑いながらそう言うウルフ。

もう、楽しむしかない。恐怖を凌駕する楽しみ。それをこの死闘で味わうしかない。

ウルフの本能が叫ぶ。『お前の思い通りにはならない』

フェーユもこれは面白くない展開のようで、不機嫌そうな表情を浮かべる。

「神ね……残念だが俺は神様なんて信じないから嘆こうが笑おうがどっちでもいいや。まっ、一つ言えるのは人間はお前が考えてるより強いぜってことだ」

遙かなる高み。そこからフェーユは語る。

ウルフもそれは感じている。だが、だからといって逃げ帰るわけにはいかない。逃げ帰ってフェーユは強すぎました。皆さん諦めましょう。言える筈が無い。ギリギリだったんだけどよ。まあ、逃がしてやったぜ。言える筈が無い。

というか、帰れるはずが無い。これだけ桁違いの人間を目の前にして帰れるはずが無い。興味心が訴えかける『こいつの底を見たい』

「なあ。もし俺がこの町の人間を盾にして脅したらどうする？」

「する前に殺すよ。俺は別に今すぐにも殺せるんだ。でも、言葉を喋り自分で考え行動する化け物なんて珍しいから、もう少し付き合っただいかなとか思っただけだからな」

「まつ、そうだな」

ウルフは考える。体が弱い分、人間は脳が発達して賢い生物となった。しかし、人間はそれだけじゃ飽き足らず、その賢い脳を駆使して、体も強い脳も強い。完璧な生物へと進化した。だが、それが欠点だとウルフは考える。だが、その考えを辿ると一つの大きな疑問に辿り着く。

何故俺たちは生まれたのか

「まあ、んなことはしねえから、ちよつと世間話に付き合えよ。俺たちよ。人間を憎んで生まれた生命体だよ。人間を殺すために生まれたようなもんなんだよ。でもよ、気づいちゃった。俺たち必要ないんだ。別に」

「……」

不思議そうな顔でウルフの言葉を聞くフェーユ。

「どうやら、フェーユも突然の話に驚いたらしい。というか、ウルフの話に対する答えが浮かばない。フェーユは動かない。フェーユも興味を持った。本能が叫ぶ。『こいつの真理を聞いてみたい』」

「そんな顔すんなよ。何が言いたいつてか？ いやあ。嬉しくてよお。力と賢さのバランスって大事なんだぜ。多分、近い将来、人間は自分達の強さ故に滅亡する。俺たちが手を出すまでもないじゃんって話。でもよお、それじゃ俺は納得いかねえんだよ。なんで俺たちは生まれてきたんだよ？ 何のために？ 人間を滅ぼすのではないのなら……何のために？」

人間の憎悪によって生まれたとされる魔族。

それは当然、人間を滅ぼすために生まれてきたはず。だが、人間は強い。目の前にいるフェーユは桁違いに強い。これでは人間を滅ぼせない。

何故だ。人間を滅ぼすために生まれたのなら、人間には負けないはず。だが、明らかに負けている。となると、何のためにこの世界に生を受けた……ウルフの興味は、フェーユの底を越え、自分達魔族の存在意義というところまできていた。

「それを俺に聞いたところでって話だろそれ？」

フェーユが投げた。フェーユの本能は、ウルフの真理を聞くことを投げた。

もう、フェーユがこの質問に答えることは無い。フェーユの本能理解度を超えてしまったこの質問にはもう答えられない。

「まっ、確かにそりゃそうだ。これでお前が俺の納得するような答えをスパッと答えるようなら、俺は一生お前を崇め続けるよ。まっ、そりゃ無理な話だわな。そりゃそうだ」

ウルフもこのことに対し、考えるのをやめた。恐らく、今の現状で結果がでることはない。

時をかけて導かれし答え。ウルフはそう理解した。こうなるともう、この場に生きることはいない。

「なあ。無敵の勇者さんよ」

「なんだ？」

「もうそろそろお喋りも飽きただろ？」

「まあな」

「とりあえず現在の結論。人間は魔族が何をどうしなくても滅亡する。これは明らかかなわけよ。だからまあ、魔族の存在意義が確立しない限り、俺の生きる意味は無い。となると、さっさと終わらせたいわけ。だからまあ、今からは魔族・人間関係無しで殺し合おうや。フェーユVSウルフとしてよ。どうやら俺は馬鹿になっちまった。考えすぎて頭がスツキリしちまったみたいだ」

「ああ。マジで馬鹿だ。でも、化け物としちゃナイス判断だと言っておこう。まあ、そういうわけで敬意を表し、一撃で斬り殺してやる」

剣を構えるフェーユ。爪を構えるウルフ。

「俺が興味を抱いた面白い化け物ウルフ。俺の人生にその名を刻もう」

ボソツとそう言うと、ウルフ目掛けてフェーユが進む。

勝負は一瞬で決着した。宙に舞うウルフの首。

ウルフの自慢の爪が炸裂する前に飛んだウルフの首。フェーユの剣が圧倒的に勝ったこの戦い。しかし、心……精神面の戦いではウルフが圧倒的。これも間違いない話。

「人間を憎み生まれた生物。確かに無限に現れるのも合致する。人間は生物のピラミッドの頂上。憎まれ役は当たり前の話。しかし、生まれた理由までは人間を滅亡させる。そうじゃない……？ あー！ 分かんね！ まあ、いいか。そんなこと考えててもしょうがない。とにかく俺は化け物を滅ぼし、人間を守る。それだけだ」

自分で自分に言い聞かせるフェーユ。

そして、町を守ったフェーユは、また人間を助けるために進み続ける。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1260u/>

The Earth

2011年10月9日08時10分発行